

# 統

法財  
人團

統

團發行

## 次 目

阿含の人身觀  
開目鈔講壇話  
(中之二)  
(第五講)

詩國士を以て任せよ  
年初に當り立正安國の精神を憶ふ  
南洲の遣訓

心の固きに由て神の説り強し

同師人の覺悟

記事

成島龍北・山根青村  
小林多一郎  
和佐小三井  
賀藤林浦上  
義皇一精一日  
見藏郎翁次郎生

## 法財團 統一團趣意

統一團へ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢献セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ産出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進

ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セン

ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事

二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ

テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シテ、嚴然シテ統一

ノ學風ト教化ヲ守持スル事是レナリ教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛此等ハ統一團ノ標語ナリ 寅ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 着クハ寔ニ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法同感ノ爲國爲一切衆生切ニ懸望スル所ナリ

## 本團略則

◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ説明シ

テ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ

理想ノ文明ヲ建設スペク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雑誌「統一」ヲ發行ス

◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金始圓以上ナ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ナ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾圓ヲ輸出セラル、方ヲ正團員トス

◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌チ無料ニテ頃布シ團章壹箇ヲ贈呈ス

◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

## 阿含の人身觀

(中之一)

### 故大僧正 本多日生

#### 二、阿含小觀

次には阿含の全體に就てこれを總括して簡単に申して置きたい。阿含といふ言葉は梵語であるが、これを翻譯すると「法本」又は「淨教」と申して、教の根本を明かしたもの、或は淨き教、尊き教といふ意味であつて、阿含とは教の本であり、善き教であるといふやうな意味である。それ故に法華經の「妙法」と言ひ、或は「法華」といふこと、阿含といふことは殆ど同じやうな意味である。天親菩薩は「法華論」の中に、法華を阿含なりと解釋されて居るので、法華經の意味の深いことを「阿含甚深」と申して居る。即ち法華の教は尊いと言つて褒める時分に、これを阿含甚深と言つて居る位である。阿含といふ言葉が嫌味に聽えたり、阿含と聞いたら直ぐつまらぬやうに思ふといふやうなことは、迷はされ後に起つた觀念である。阿含といふ言葉も法華といふ言葉も殆ど同じ位の非常に尊い言葉である、言葉としては少しも申し分の無い立派な言葉である。

さうしてこのお經の數がどれ程あるかと申せば、一切經七千卷といふ中に凡そ二千卷は阿含經といふものである、その中に纏つた阿含經が四つある、それは增一阿含、中阿含、長阿含、雜阿含と申すので、これを合せて四阿含經と申して合計百九十九卷あるのである。この四阿含經に就て研究をすれば先づ阿含の意味合は能くわかる譯である、この他に別譯雜阿含經といふものが十六卷ある、それも先づ合せて研究して宜からうと思ふ、その他は見ても宜し見ないでもわかる譯である、先づ二百卷ほどのお經を精密に研究する必要がある。

さうしてこの阿含の説かれた年代といふものは、最初の十二年間、その説かれた所は鹿野苑であるといふやうなことを古來言はれて居るけれども、決してさういふものではない、阿含經の説かれた時間は釋尊成道の時から涅槃に至るまでズッと續いて居る。であるから阿含の中に涅槃經といふものは三通りもある、釋迦老後の事に關しても澤山説かれて居る、一代の事柄如何なる事でも無いことはない、釋迦の一代記でも既に阿含部の佛本行集經といふお經が五十卷ある、それは今之四阿含以外であるが、そのお經の中にも釋迦一代の事はスツカリ書いてある。又釋迦以後に現れる阿育大王の話でも或る所には出て来るくるることであつて、決して阿含經が釋迦成道の初め十二年間に限るといふやうなことは言はれない。又その説かれた所も到る處に亘つて居るので、一代の説處に亘つて居る譯である、隨て話の内容も極く僅かの事を最初の間淺い所だけ切つて話したといふやうな意味のものではない。

最初の結集として佛教全體を総合して、これならば先づ佛教を代表するものである、これが事實の佛教であるといふので、即ち「これが釋迦の教である」として最初に編纂されたものが阿含經であつたのである。それを又他の側から結集する者があつて、華嚴經が出來、寶積經が出來て來るのであるけれども、先づ信憑すべき第一結集の最も完備したる佛教として現れたものが阿含である。それからいろ／＼のものが現れて纏りが附かなくなつた、それを法華經が纏め、涅槃經がこれに賛成して一層その意義を明瞭にしたといふのが佛教の全體である。それ故に阿含經の抱負といふものは、大乘諸家の人々が侮辱するやうなものではないのである、なか／＼堂々たる教を以て阿含經といふものは出來て居る、その意味をちよつと紹介して置きたいと思ふ。決して阿含はたゞ佛教の一小部分を以て任するといふものではないのであつて、即ち阿含だけを以て一切の佛教が完備するといふ理想を以て出來て居るものである。總てお經を結集する時は皆その考を以てやるので、華嚴經なら華嚴經だけで完備せりと思ふほどの抱負で華嚴經といふものは出来るのである、けれどもそれが事實は偏つて居るお經が多いのであるが、阿含經は左様な理想で現れたと同時に、その内容が甚だ豊富にして完備して居るのである。中阿含經の卷三十に斯ういふ言葉がある、

我が法は善說發露極廣善護にして空缺あること無し、橋樑浮具の如く遍満し流布す。

これはどういふ意味かといふと、阿含の教といふものは非常に善い教であつて、大事な事柄は少しも隠れて居らぬ、皆な大切なことを發露して説き現し、それが極めて廣く極めて深く、モウ大事なものはスツカリ現してあるから、空缺と言つて缺けた所だの空しい所は無い、その内容は充實完備して居つて缺目は一つも無い。さうしてこの教を一部に止めるのではない、これを以て一切衆生を救ふが爲に、これが衆生を救ふところの橋であり、棟であり浮具である、大勢の海に溺れんとする者があるところに、澤山の浮袋を流してやつて助けてやるが如くに、その浮袋に捉りさへすれば人生の沈淪を通れるやうにしてやりたい、全世界にこの浮具を流して一切衆生を救ふのであると言つて居る。この言ひ表し方の『空缺あること無し』といふやうな所は、洵に能く阿含の精神を言ひ表して居るのである。

その他左様な抱負といふものは、日本の一般佛教家が侮辱したやうなことは全然正反對の立場に阿含經は居るものである、あらゆる問題に關して實に驚くやうな事ばかりと申して宜からうと思ふ。それはこれから人身觀に關して申上げる中にも直ぐ現れて来るし、その他あらゆる重要な問題を順次に阿含の教説の上から御紹介しよう考へて居るのであるから、阿含の教が如何なる價値を有ら如何なる内容のものかといふことは、實際のそれ／＼の問題に關して申上げる積りであるけれども、總括して驚くべき事が非常に多いと思ふ。

先づ今日は人身觀の大要を申上げようと思ふが、それに就ても能くお考へになつたならば、到底阿含といふものは馬鹿にすることの出来ないものであることが能くわかるのである。

### 三、阿含の人身觀

普通には阿含の人身觀といふものは業感緣起説と申して、人間が悪い事をしたから罪の報ひとして、人間に生れて来て苦勞ばかりするのである、惡業煩惱の塊りである、罪の衆生である、ちょうど基督教が人間は罪の子ぢやと言ふ如くに、阿含は人間を罪業深重の衆生と稱して、左様に人間を悲觀の側から眺めるのである。さうしてその覺りといふものはだん／＼進んで行くと、要するに人間といふものは、この身があるから迷ひ苦み罪を犯すのである、心があるから左様になるのだから、身を無くし心を無くして、空々寂々、一切を無くして灰の如く消え去つてしまへば宜しいといふ、所謂空觀に居るものちやといふことを今までの大乗家は悉く言ふて居る。吾々も子供の時分から聽いたのはさうであつた、言ふこと、書いてあること皆さういふことばかりで、小乗の羅漢といふものは畫家が描いても、ボカシと口を開けて空々寂々といふやうな態度のものばかりである。さういふことは小乗に對して、大乗家が一種の誤解を以て見たのである、一人がさう言ひ出すると、その他の者は阿含の内容などは少しも知らない者ばかりであるから、皆その通りに附いて行つたのである。人間といふものはその點に於ては實に恐しいもので、大勢がワイ／＼言つて附いて行き居るからと言つても、決して銘々が正しい判断を以てやつて

居るものではない、ちょうど大震災の時に朝鮮人が謀叛を起すとか火を放けるとかいふことが傳はつて「そら來た！」と言つて騒いた、横濱でもさう言ふし、埼玉でもさう言ふ、千駄ヶ谷でも言ひ居れば小石川でも、本所でも、大宮でも、千葉でも、そら來た！と言つて非常に怖がつた。實に今から考へて見ればおかしなことである、「俺が今確かに見て來た、朝鮮人が三百人もやつて來た」ナンと言ふ、一人も居ないのに三百人も來たと言ふ、そのくらゐ人間といふものは馬鹿な者である。殊に佛教の阿含經などといふものは見た者は無いし、内容を披けて見てもわからぬのであるから、「こんなものは空々寂々だ」と一人が言へば、「成程さうだ、空々寂々だ」と皆な言ふ。朝鮮人のやうに人間の肉眼を以て見るものでさへも、一人も來ないので三百人も來たと言つて騙される位だから、「阿含經は空を説いたものだ」と言はれゝば「成程さうか」と言つて騙されたのは、敢て昔の人が馬鹿だとは言へない、今のはそれよりモツと馬鹿な譯である。いくら何でもそんなに間違ふことはなからうと諸君は言ふかも知れぬが決してさうではない、非常な間違ひを有つて居る、偉いやうな人がちよつと言ふと、後は皆その尻馬に乗つて言ふたものである。

ところが決して阿含の教は人間をさういふ罪惡の一方からは見ない。罪惡の側から見るといふことはこれは無論大乗でも、人間は放任して置けば罪を犯し人殺しをするやうな罪惡性を有つて居るものであるから、その罪惡の方面を説くことはあるのであるけれども、その炭團見たやうなものが、表面は真黒

であるが果して中のしんまで眞黒かどうかといふことが問題ナンである。ところが阿含の説教といふものは決してさうではない、スワカリ中まで炭團の如くに眞黒なもので仕方のないものならば、叩き潰して木薙徹塵にして無くしてしまへばその穢ないものは消えることになるから、一つも残らぬやうにしてしまはなければならぬ、併し表面は穢なくとも中の方に本當に光るダイヤモンドの玉のやうなものが炭團の中に有つたとしたならば、これを一緒ににして棄てゝしまふことは出來ない、そこが問題ナンである。お互ひ人間の人身觀に就て大事な問題はそこに残る、あとは大抵宜い加減な問題である。實際は人間の持つて居る物は、錢が有るからと言つても何が在るからと言つても、最後は皆な取られてしまふ。手に持つて居ると言つたところが取られてしまふ。併し自分の魂といふものは最後まで残るのである、表面は濁つた眞黒なものであるけれども、これを搔き分けてその生命の奥に永遠の光たるべきものがあるならば、それが本當の頼みにすべきものである。亭主よりも娘よりも、銀行の通帳よりも株券よりも何よりも頼みにすべきものは、自分の生命の内容に於ける眞の價値といふものに歸着する、そこを突止めるのが宗教である。これを本當の真理の上から、正しきお釋迦様のやうな偉い人から證明された時、公證役場で公正證書を握つたよりもモツと確實に「有り難い、これ有るかな」といふ所に悦びの源が定まつて、そこから有難いといふ信仰の根柢が出て来なければいかぬ。それを今私が論じて居る阿含の教説は、果して從來の人があつたやうに人間は罪の塊りで、炭團の如く徹底して棄てゝしまはなければ

ならぬものであると言つたかどうかと言へば、決してさうではなかつたのである。

それから尙ほ女の問題が起るのであるが、これは女として別に論する必要はないので、道徳宗教の上には等しく人間として論じたら済むべき筈であるのに、妙にそこに女といふ問題がひつ附いて来る。女を特別扱ひにするのである。それは婆羅門教に於てもさうであるし、いろ／＼の教の中にさうなつて居る、儒教などでもいろ／＼言ふけれども、女子と小人と言つて組合せが非常に悪い、君子と女子と言ふなら宜いけれども、女子と小人は養ひ難しといふやうなことを言つて、女を非常に侮辱して居る、さういふ思想は東西に亘つてあるのである。西洋に於ては今日いろ／＼女子の解放運動だと女權だと言つて居るけれども、さういふことを唱へられるだけ從來はやはり壓迫されて居つたのである。

ところが阿含の教はさういふことは少しも無い、これは驚くばかりである、大乗佛教と誇つて居るところの日本佛教は各宗通じて女子に關する思想が甚だ不透明である。今日に於ても何だか女性といふものは男子に較べて及ばぬ所があるかの如く、又吾々が宗教の方の書物に書いてあるのを見ても、女といふものは罪が深い、三千世界の男子を集めてその總ての有つて居る罪と一人の女の罪と較べて考へて見た時に、まだ男の罪の方が軽いといふやうなえらい事が書いてある。それから女を一たび見たならば地獄に墮る、故に女は地獄の手引であるといふやうなこともある、果してさうであるならば東京などに住んで居ることは出來ない、一人や二人ではない、毎日々々幾らでも地獄の手引が一バイそこに居る譯で

ある。或は女の心は曲れること川の如し、山より出でゝ海に入る川一つとして真直ぐに流れて居るものはない、皆な曲り曲つてうねくねして居る、總ての女性亦斯の如く、一人として心の真直な者は無い。石に字を刻めば永久に消えない、水に字を書けば書く側から消えて行く、女の心は善い事を教へた時には水に字を書くやうなもので、教へる側から忘れてしまふ、悪い事を教へば石に字を刻むが如く一遍教へたら百年でも覚えて居る。さういふやうなことを澤山坊さんの口から言ふて居る、私共も若い時分からたび／＼さういふことを聽いて居つたので、お釋迦様が言ふたことかと實は思つて居つたらるである。併し左様な事は皆な嘘である、お釋迦様はちようどその正反對の事を説いて居る、これも非常に重大なことである、私は日本の女性が自覺すると言ふたならば、佛教に女性觀を如何に教へて居るかといふ問題を先づ十分に研究すべきであらうと思ふ。東洋民族の宗教として、如何に藻擾いても跳ねても佛教といふものは東洋民族と離れるものではない、東洋の文化と縁を切るものではない、その佛教の女性觀が如何なるものであるかといふことをハツキリして置かなければならぬ。ところが阿含の教に於ても女性問題は屢々出て来るが、釋迦如來は女性に關しては驚くべき立派な考を有つて居られる、その事は直ぐ後に證明することが出来る。

それから悪人に對する事柄であります、宗教は罪惡の者を教はなければならぬといふ點に於て、阿含は如何なる兇暴極惡なる者でもやはりこれを濟度せられて居るのである。たゞ阿含の教が消極だとい

ふことに就て問題が残るが、これは私は姉崎博士とも話した事がある。姉崎君は『どうも君の議論は餘りに阿含を積極的に買ひ被り過ぎて居る、何と言つても阿含は消極の色彩を脱し得ないものだ』といふことを言つて居りましたが、私はさういふことは縱ひ姉崎君が言ふてもその議論は採らないのである。姉崎君はまだ／＼さう言ふてもやはり阿含は消極であらうと考へて居る、やはり傳統的の思想だと思ふ。極く公平に阿含の研究を遂げた場合に、果してそこに阿含の消極といふことが言へるか、決して言へない。私は断言をする、それは今日お話しする事だけでも諸君が諒解し得ると思ふ。たゞ阿含には人間の煩惱に關してこれを諷める教訓は非常に多い、それ故に煩惱を諷めるやうな教訓が多い方から眺めて消極的だと言ふかも知れぬけれども、私は人間といふものは何時の時代でも墮落を諷め、煩惱を諷めるといふことは、宗教道德の上に於いては強大なる力を有つて居らなければならぬと思ふ。それは決して消極的ではない、人はちょっと油斷すれば墮落罪惡に赴きたがるものであるから、釋迦如來が徹底的にその點に就て教を垂れられることがやはり人を可愛がる所以であり、人々を幸福ならしめる所以である。決して人間の罪惡性であることを痛切に説いたからと言つて、それを以て消極的の教と断定することは出来ないと思ふ、やはり宗教道德は何時の時代でも今日のやうな頗廢氣分よりは嚴肅な氣分、墮落の氣分よりは向上の氣分といふ所に絶大なる力あらしむる教訓を必要とするのではあるまいか、私自身に就てもさう思ふのである。それを窮屈だと強過ぎると思ふのは、人間が勝手な御都合主義から考へるのではないか。どうしても人間全體を愛護する方の人から言ふたならば、人間の煩惱といふものは宜しくない、氣を附けないと嵌るぞといふことは、一遍よりは二遍三遍、少し多過ぎるけれども五遍ぐらゐはあつても宜からうと思ふ、それが直に消極的なりと言ふことは言へない。本當の優しい親であつたならば娘が何處かへ出懸けると言へば「能く氣を附けなさいよ、不良少年が居るから」と言つたかと思ふと、又出懸ける時分に『本當に氣を附けるンですよ』と何遍でも言ふ、娘の方では『お母さんモウわかつて居りますよ』と言つて煩さがるほど親は何遍でも子供に注意する。それが爲に親が決して消極的人とは言へない、どうぞ我が子の上に過ち無かれかしこ考へる親切な精神から諄くも言ふのである。阿含の教もやはりその通りであつて、人間といふものは左様な罪惡性の強い者であるから、これに屢々警告を與へて過ちを執らせないやうにするといふことは、やはり釋迦如來の慈悲であると思ふ、私はさういふ解釋を有つて居るのである。さういふことは全體に就て公平に研究して見なければならぬことであるが、私の見た所はさうである、兎に角私は少し見たのではない、阿含全部を残らず見て居るのであるから、兎に角總てを見たといふ點に於ては私くらゐ見た者は無いと思つて居る。随つて全體の上の考が自然に澤山見るといふときまつて来るものだと思ふ。(次續)

# 開目鈔講話

(第五講)

## 一念三千に對する用意

### 小林一郎

前講に申しました十界の中の地獄、餓鬼、畜生、修羅、人それから天、この六つは凡夫の通つて行くところの世界であります。斯ういふ事を繰返して居つて、或る時は怨んだり、或る時は喜んだり、さうかと思ふと又ガツカリしたりといふやうな事を幾ら繰返して居つたところが、一向人生の意義といふものは無い。若し斯ういふ事を繰返すだけが人間の生活であるならば、生命が永く續くといふことは少しも嬉しいことではない。生命が永く續いて行く間にだん／＼と進歩して、だん／＼と善くなるといふ

見込があつて初めて永く續くことが嬉しいのであります。そんな地獄や餓鬼や畜生道のやうな事を繰返し／＼やつて居るなら、何千年何萬年生きたところが幾度生れ更つたところが、少しも嬉しいことはない譯であります。だからさういふ事をお考へになつて、佛様は世の中にお出になつて、六道をグル／＼廻つて居るところの凡夫の生活を何とかして教つてやりたいといふお考で教をお説きになつた。

そこでそのお教をお説きになる順序はとうであるかといふと、先以て世の中のいろ／＼な變化に執は

れないやうな心持をつくるといふ所から始まる譯であります。どうも凡夫の生活といふものは、甚だ心許ないものでありまして、少し工合が良くなると有頂天になり、少し工合が悪くなるとガツカリする。周囲の者が讀めると心が騒ぎ、周囲の者が譲ると落膽する。そんな事ばかりやつて居るのであるからそれでいいかぬ。それでその心持を直すには、先以て世の中の名譽とか地位とか勢力とかいふものがそんなど大した意味を有つて居るものではない。そんな事だけで人間は生きて行かれないのでいふことを本當に教へなければならぬ。それが屢々申上げた佛の小乗の大體の筋であります。さういふやうにして佛の小乗の教を聞いて世の中の無常を感じる者が出来ると、それが所謂「聲聞」であります。聲聞といふのは聲に聞くと書いてありますが、自分の耳に教を聞く。これは昔の事で、昔は書物など硯に無かつたのですから、教を聞くのは耳に聞くよ

り外ないので、聲聞といふ字を書いてある。今では書物が澤山ありますから、眼で見て本を讀んでも宜しいのですが、兎に角教を聞いてさうして世の中の無常を感じる者、これが聲聞であります。

無常を感じるといふことは、それだけで終つてはいけませぬけれども、兎に角私共が心をしつかりと建直す上に於ては、無常を感じることは非常に必要なことナンです。私などは東京で育つて居りました、この數十年間東京の街の變遷して居ることを能く知つて居りますけれども、僅に三十年か五十年の間に東京の街の様子を見ても、それは實際無常です。大きな店が幾らも潰れて居る。大變立派な生活をして居つた者が一向つまらない者になつて居るといふやうなことがある。或は又山であつた處が平地になつた處もあれば、もと川か池であつた處が埋つて其處に大きな家が出來て居るといふやうな處もある。實際人生の變化といふものは、僅か三十年か五十年

だけで考へても非常なものである。さういふ變化極

まりないところの人生に心を惹かれて、その變化の一つ／＼に一々累ひを受けて居るといふことである

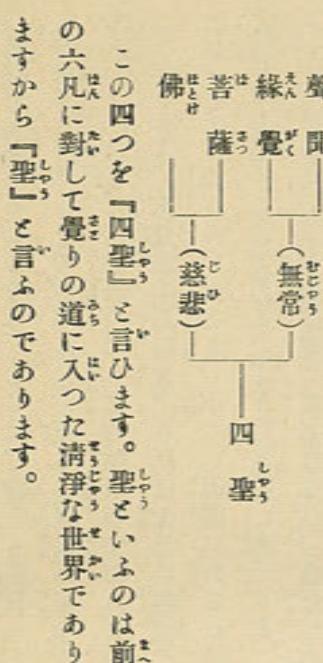
ならば、その人の一生といふものは決して意味の有る一生になり得ないのでありますから、マア實際にはそこから所謂覺りの道といふものが開けなければならぬ譯であります。そこで無常を感じるといふことを教へられる、それを耳に教を聽いて無常を感じる者が即ち聲聞であります。

それから又「緣覺」といふものもある。これも同じく無常を感じるのであります。この緣覺の方はただ教を聞いただけでなく、緣に依つて覺る。緣といふのは日常の出來事でありますが、自分が毎日見たり聞いたりするところのその出來事とそれから聞いた教とを比べ合せて、思ひ合せて、さうして成程世の中は無常である。世の中のつまらない事にばかり心を惹かれるのは愚かであるといふことをしつかり

と思ひ極める、これが所謂緣覺であります。

さういふやうに世の中に求める心持が無くなつて

金が欲しいとか、位が欲しいとか、地位が欲しいとかいふやうな事ばかりを考へないで、モウ少し心が高尚なものになりますと、一體何しに自分が生きて居るかといふことを深く考へて、自分が折角世の中に生きて居る以上は、この自分の生きて居ることが周囲の人のお役に立つやうに、自分一人で生きて居るのではつまらないから、何とかして周囲の人の役に立つて、生き甲斐のある一生を送りたい。斯う思ふやうになつて来る。初めから慈悲を施せと言つても無理であります。世の中に執はれないやうな心持を持つつくらして行くと、結局求める所が無いのですから、自分の方から與ようといふ心持が自然に起きて参る。さういふ心持を起した者が所謂菩薩であります。これは慈悲の心持が中心になつて行く、自分の存在することを無意味にすまい。自分が生きて居



る爲に幾らかでも他のお役に立つやうにしたいといふ心持をしつかりと有つて、さうして人を救ふのに自己がその力がなければ救へないし、人を教へるのには自分が迷つて居ては人を教へる譯に行きませぬから、人を救ひ、世の中を善くしたいといふ大理想を有つて、自分の修行をして行く。斯ういふやうな境遇の者が即ち「菩薩」であつて、その菩薩の行がだん／＼と進んで、これがモウ完全無缺なものになれば「佛」であります。佛は無論慈悲の心持が中であります。

斯ういふやうに、地獄、餓鬼、畜生、脩羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛といふ十の世界が算へられる。その十の世界は別に他にあるのではない、我の心の中にあるのだといふことが言はれて居るのあります。實際私共が自分を反省して見ますと、如何にもこの十の世界がある。或る時は瞋恚を起したり、或る時は貪りの心持が起きたり、或る時は人と争ふやうな心持が起きる。併ながらそればかりではない、又或る時には世の中は測り知れぬもので、變化が多い、こんな變り易い世の中に執はれてはいけまいといふやうな心持も時あつてか起る。それから又慈悲の心持なども無論起る。いきなり一切の人を教ふといふやうな心持を有つことは難かしいけれども、一軒の家の中に於て、親子の仲、夫婦の仲、兄弟の仲などに於ては、兎にも角にもお互に自分を捨て、相對する人の爲に力を盡さう。嬉しい事も一緒に喜べば餘計嬉しい、苦しい事も一緒に苦しめば

我慢がし易いといふやうなことは、誰でも経験して居ることであります。さうして見ると無常を感じるといふ心持も、普通吾々の日常生活の中にあります。又慈悲の心持も、それは大きい範圍にはなか／＼及ばぬけれども、小さい範圍に於ては始終起つて居ることである。さういふ風に考へることの十の世界といふものは他の事ではない、自分の心を離れずして、始終自分の心に十の世界が替る。）に現れて來るといふことは否定の出來ないことであります。

ところが佛様に成つてしまへばもうスワカリ覺つてしまふから、再びもとの凡夫の境界などに還る筈はない。佛に成りきらない間、本當の覺りを得ない間に於ては、心といふものは始終動搖するのであります。覺つたやうな心持を有つて居つても、又迷つた境界に戻らないとも言へない。又迷つて居つても時に依つて反省して見ると、その甚しく迷つた境界

その心の奥に、慈悲を行ふとか世の中の無常を感じ  
るとかいふ心持がまるで消えて居るのではない。た  
だその心持が勢力を失つて、さうして自分の我儘の  
心持だけが表に現れて、力を振つて居るといふだけ  
に過ぎない、洵にこれは十界互具であります。この  
十の世界の中で現在自分の心の中心を成して居るもの  
のはどれであらうとも、他の世界に行くべきところ  
の性質がまるで無くなつたとは言へない。斯ういふ  
ことあります。

これが十界五具であつて、この事が本になりますて十界がお互に他の十の世界の性質を具へて居りますから十と十と乗合せて所謂「百界」といふことになります。

それに「十如」といふことが考へられる。これは元來は「十如是」といふのでありますか、是の字を略して十如と言つて居ります。

如是本末究竟等  
これは皆さんが始終お読みになる法華經の方便品の中にある言葉をその儘用ひて居るのでありますから別に珍しいことではないのでありますか、一體これは總ての物の存在する爲の根本の條件であります。

から離れるこゝも出來る譯であります。それですか  
ら今いはの十じゅうの世界よののものが他の世界よのに行くべき性質せいしつを  
有あつつて居ゐるといふので、この十界じゅうかいといふのはこれを  
「十界互具じゅうかいごき」と申まことすのであります。今いはの十じゅうの世界よのが  
互に他の世界よのに行くべき性質せいしつを具へて居ゐるといふこ  
とであります。この慈悲じしの心持じどりを有あつつて人ひとを感かんれん  
で、人ひとを助すくけてやるといふやうな氣分きぶんで居ゐつても、  
貪ますはつたり、瞋じみつたり、憎にくんだりする心持じどりが全く無く  
なつたとは言いへない。やはり心こころの何處か底そこの方ほうには  
幾らか殘のこつて居ゐる。たゞマアさういふ悪い心持じどりが勢  
力を有あつつて居ゐないからいゝやうなものゝ、心こころの何處  
かにはそれがまるで無むくなりはしない、残のこつて居ゐる  
のだから、何か周圍じゅういの事情じごが變かわれば、又その怨うらむと  
か憎にくむとか嫉ねらむとかいふやうな心持じどりが勢力せいりょくを有あつつて  
來くわるかも知しれない。それは隨分油斷ゆうだんのならぬ話はなしであ  
ります。又併またながら貪ますはつとか憎にくむとか瞋じみるとかいふ  
心持じどりが非常に勢力せいりょくを有あつつて罪ざいを犯はんして居ゐる時ときでも、

人間は勿論草一つでも木一本でも、石塊一つでも、凡そ世の中に物が存在する以上は、その存在する爲に十の意義が具はらないといふ筈はない。善くても悪くとも物があるといふ以上は、ある爲にはどうしてもこの十の條件が具はるのであります。

先づ「如是相」といふのは外に現れる相、有様です。例へば白墨が白いといへば、この白いといふのは如是相です。黒板が黒いといへば黒いといふのは如是相です。月が圓いといへば圓いといふのは如是相です。兎に角一つの物があれば、その物の性質が自ら外に現れます。これが如是相であります。「如是」といふのはいつでもといふことで、いつでもさういふ性質が現れないことはないのでありますから、それを如是相と言ふ。今は色や形に就て例を探りましたけれども、聲とか香とかいふやうなものでも、その通りであります。香水の香がブーンと芳い香がするといふことも、それも如是相、上野の鐘がゴー

ンと鳴る、そのゴーンといふ音も如是相です。兎に角外に現れて行くところのその有様が即ち如是相であります。

ところがさういふ外に現れるはどうして現れるかと言へば、そのものゝ本來有つて居る性質が現れる。内に無いものが外に現れる譯はないのでありますから、本來有つて居る性質が自ら外に現れるのであります。そこで外に現れるものがあるといふことを知るならば、その次にはその現れるものゝ根本であるところの性質がそこに具つて居るといふことも知らなければならぬ譯です。それが『如是性』です。

それからその性質が具つて居るといふのは、たゞ性質だけ具つて居るのではなくて、その性質を有つて居るところのものがそこになければならない。人間でも或は草でも木でも、白墨でも黒板でも、兎に角さういふものが存在して居る。その存在して居る

ものがさういふ性質を有つて居るのでありますからそこで性質といふことを考へる以上は、その性質を具へて居る實體が有るといふことは考へなければならぬ。それが『如是體』であります。

この「相、性、體」の三つは離れることが出来ない。外に現れるのは何故現れるかと言へば、性質があるからである。性質はどうして有るかと言へば、その體に具つて居る。斯ういふ譯です。これを通じ言へば、體が有れば必ず性質が有つて、性質が有れば外に現れる。斯ういふことになる譯であります。これが根本であります。佛様に就て言へば佛様が大勢をお教ひになるといふことは相である。そのお教ひになるのは大きな慈悲を具へて居らしやるからだといふことはその性である。その慈悲を具へた佛様がチャンといつても存在して居らしやるといふことはそれは體です。斯ういふことになる譯です。いつも物の相、性、體といふ三つは離れることは

出来ないのであります。善い物でも悪い物でも、有ゆる物がさうです。だから前に言ひました地獄、餓鬼、畜生、脩羅といふやうなものでもやはり相性體を具へて居るし、或は聲聞、緣覺、菩薩、佛といふやうなものでも相性體を具へて居るのであって、この三つが具はらなければ、凡そ物が世の中に存在するといふことはテンで考へられないのです。

先づこれが根本であります。

ところが世の中に在る物は一つではない、幾つもある、人間もお互一緒に居りますけれども、天地間の物は皆一緒に存在して居りまして、孤立して居るといふものは無い譯ですから、そこでそのお互の間に「力、作」といふものが出来て来る。力といふのは一つの物が他の物を動かす力を有つて居る、その動かす力を有つて居るといふことが他の物の上に現れて来る。これが力作であります。これは世の中の物が皆さうです、人間でなくともさうでせう。例へ

ば空氣といふものがあれば、空氣が動くと風になる、風になると物を動かすといふ力を有つて居るから、力が自ら現れてひどくなると、家が倒れるとか木が吹き倒されるといふやうな作をして来る。電氣といふものがあれば、電氣は光を發する力を有つて居る、それが集められて電氣燈になれば、部屋を明るくするといふ作用を起す。

斯ういふ譯であつて、凡そ世の中に物が存在して居る以上は何かの力がある。まるで力の無い物といふものは無い。力があればその力は自ら現れてはたらきとなる譯であります。何のはたらきもしないといふ物は世の中に有りはしない。佛様であれば、佛様は一切衆生を救ふといふ力を有つて居らつしやるから、それが一切衆生に對し一々救ひを與へるといふはたらきをなさるでせうし、人間がつまらない者であれば、又人を迷はずやうな、人をとんでもない方に向けるやうな力を有つて居るから、それが現はすのです。

私が話して居るのだから、電車、自動車が私を引張つて来て話さして居るのだから判らぬやうなものであつて、これは善い事、悪い事、皆さうでせう。自分だけの力で出来るといふものではない。世の中は相持ちでありますから、いろいろの力が綜合されて、お互に助け合つて、お互に影響し合つてさうしてその結果を生じて参る。それを因縁果報といふことであらはすのです。

『因』といふのはそのもとであるところの或るはたらき、『縁』といふのは周囲の境遇事情です、その物があらはたらきをするには周囲の境遇事情がこれに應じなければならぬ、だから幾ら善いはたらきをしようと思つても、縁即ち周囲の境遇事情が悪ければ善いはたらきは出來ない。又チヨツとした事であつても周囲の境遇事情が善ければ、思ひ掛けない善い結果を生ずるといふ事にもなります、でありますから因と縁といふものを兩方考へなければならぬ。善

き因と善き縁がありますれば洵に結構でありますがヒヨツとすると縁が悪かつた爲に善き因もそれだけのはたらきを現さないといふことも随分あるでせう。それで因と縁とが揃はなければいかぬ。

因と縁とが揃ひますと『果』といふその結果が生ずる。その結果が出来ますと、それが後までそのはたらきを遺します。それが『報』であります。報といふのはその結果を後まで遺すはたらきを申します。例へば實例を探つて見ると、私共が斯うやつて宗教の事などを研究して居る。それはその因といふのは自分の努力です。吾々はボンヤリして坐睡して居つたのでは、修行も何も出來はしませぬから、因といふのは自分の修行です。ところが修行したら宜いと簡単に言へないので、下手な教を本にして修行すると、却て世の中を惑はしたり、人に迷惑を及ぼすことになりますから、そこでその修行を完全にすれどには善き縁を選ばなければならぬ。その縁とい

れて誘惑をするとか、皆を迷はすとか、悪い方に引張つて行くやうなはたらきを生ずるといふ譯であつて、どうしてもこの力作といふものは、凡そ物が存在して居る以上はこれを認めなければならない譯であります。

それから今度はその力が外にはたらくといふ、それははたらき方をモツと精しく調べて見ると、『因、縁果、報』といふことになるのであります。これは物のお互にはたらき合ふ状態を精しく調べたことあります。何故因縁果報といふことを説かなければならぬかといふと、只今申すやうにいろいろな物が一緒に居るのであります。その一緒に居る以上は、一つの物がはたらくのには他の物の助けを借すにははたらけない、自分ででははたらきをするといふことは出来ない。例へば私が今此處に来てこんなお話ををして居ると言つても、電車か自動車か何かに乗らずに此處へ来る譯には行かないやうな譯ですから、

ふのは所謂教法です。善き教を縁として、その原因となるところの修行を自分で一生懸命勵まなければならぬといふことになる。何でも努力したら宜いといふことはありはしませぬ。役に立たない事に努力しても仕様がない、電車や汽車の後を三時間か五時間追駆ければ随分努力するけれども、何の役にも立ちはない。骨折つたら宜いといふものではない。

骨折るには何を本にして骨折るか、善き縁を求めるいでたゞ努力するといふことは愚かなことであります。そこで自分の修行を因として、善き教を縁として、この因縁とが揃ひますと、その結果として所謂徳を成することが出来る。自分の智慧も開け、自分の心持も立派になりまして、洵に徳の有る勝れた人になります。さうすればその徳を成就したといふ結果が外に現れて、大勢の人間を利益するといふ事が出来て来る。ですから因縁果報といふ四つが揃つて居る自分の修行が因であつて、善き教

を求めるのが縁であつて、それから徳の具はるのが果である。その徳に依つて一切の人を救つて一切の人を導いて大勢に利益を與へるのが報。斯ういふ譯で因縁果報といふものが揃ふのであります。

これは今善い例を言つたが、悪い方でもその通り。自分の心持が悪ければ、悪い縁が集まるから、結局悪い結果が出来て、それが後まで、親、親類、兄弟にまで迷惑を及ぼすといふやうなこんでもない報が出来る譯でせうから、因縁果報といふものは總てに就て言へる。凡そ世の中に物が存在して居る以上、人間であつても人間以外のものであつても、この因縁果報の理法を離れる譯には行かないのです。

斯ういふのが『相、性、體、力、作、因、縁、果、報』といふことであります。この九つの條件はどんな物にでも具つて居る。人間は勿論、そこに草が一本生えて居るので、木が一本生えて居るのでも

能く者へて見るこ、相性體を具へない物は無いし、力や作を具へない物は無い。又それが世の中に影響を及ぼす上に於て因縁果報の關係を有たない物は無い。善い物も悪い物も、世の中のどんな微弱な物であつても、この相性體力作因縁果報の關係を有たずして、世の中に存在するといふことは到底出来ないのです。それだから一番終ひに『本末究竟等』と言つて、究竟して等しいと言はれる。究竟してといふのは、ツカカリ總てに行渡つて皆同じやうに斯ういふ性質が具つて居るのだといふのです。本末といふのは、初めの『相』といふ所から、終ひの『報』といふ所まで、以上算へ上げた九つのものが皆何にも具つて居るといふので、究竟して等しくて、因縁果報といふものを具へないで世の中に物が存するといふことは決してあり得ない。斯ういふの在究竟して等しく申すのであります。

これが所謂十如是といふことでありまして、略して十如と言ひます。

この十如といふのは、地獄界にも具はれば、畜生界にも具はれば、餓鬼道にも具はるといふことで、兎に角有ゆる物の有ゆる性質の中にこの十の條件がすべて具はるのですから、そこで前の百界に十如是が皆具はるといふので、所謂『百界千如』と言つて、百界に十を乘けますから千になる。そこでこれを『千如』と申すのであります。先づ大體に於て斯ういふことで千如といふことが解つたのであります。すが、そこでこれを人間の上に就て考へて見ると、人間は皆今の千の條件を具へて居るのであります。更にこれに三つの世間といふものを認めます。それ

衆生世間  
國士世間

であります。『五陰世間』といふのは、これは人間の心のはたらきを五つに分けたので、

色受想行識

これを五陰と申します。陰といふのは「蘊」の字を書いても同じなので、これは積り重なるといふやうな意味です。吾々が毎日生活をして居る間にこの五つのものが積り重つて人生となつて行くといふ意味で五陰と申します。『色』といふのは、吾々が毎日生きて居ると外からいろ／＼な刺戟を與へられて感覚が起る。それが色です。例へば眼で色や形を見る、耳で聲を聞く、鼻で香を嗅ぐ、舌で味ひを感じると

いふやうに、外からの刺戟に應じてそれ／＼のはたらきが起つて参ります。これが色であります。それから「受」といふのは、さういふ感覺が起つて色や形が解つたり、聲が解つたりしますと、それに就て好きだと嫌ひとかいふやうな感情が起ります。これが受です。受といふのは感情です。好き嫌ひ、その他求めるとか避けるとか、いろ／＼な感情が起つて来る。善い物は求めるし悪い物は避けるのであります。さういふやうなはたらきが起つて参ります。それが受です。

さういふのが本になります、「想」といふのはいろ／＼な分別が附いて来る。あれを斯うしようとかこれを斯うやらうとかいふやうな思慮分別、いろいろな世の中の分別が附いて参ります。それが想です。そのいろ／＼な分別が自ら行ひに現れます。人間の行ひといふものはもとより心の中には、たらきが外に現れるものであります。その行ひを決定するといふ

ことが「行」であります。

それから一番終ひの「識」といふのは、以上のものが統一されて纏つて始終はたらいて行くといふことであります。識といふのは纏める力です。眼で物を見るのは眼だけで見て居るのではない、耳でもを聽くのは耳だけで聞いて居るのではない、一切の感覺、一切の感覚、一切のはたらきといふものはいつも纏まって、自分の行ひ、自分の心持となつて茲に發展をして行くのでありますから、スツカリこれを纏める力のことを識と申します。

この五つが幾らも對立して居る。だから五陰世間と言ふ、世間は皆相對して居るといふ意味であります。今普通に言ふ世間の人といふやうな意味とは少し違ひまして、世間といふのはお互に相對して居るといふことです。今の五陰のはたらきといふものが、始終相俟ち相助けてお互のはたらきを進めて居る。その五陰が揃つて居りますのが一人の人間です。今

の言葉で申しますれば個人です。個人といふのは今この五つのはたらきの揃つたものであります。ところがその個人と個人とが又相對して居る。だから「衆生世間」と言ふ。衆生とは個人のことです。人々のことと言ふので、人々の人が皆相對して一緒に暮して、お互に助け合つて、お互に力を添へ合つて行くのでありますから、これを衆生世間と申します。

その衆生が相集つて國をつくる、國といふものは出世目に出來たものではなくて、人間の本來親しみ合ひ、教ふところの本性が現れて國といふ形になるのですが、國といふものは偶然のものではない。人間が生きて居る以上は必ず國といふものはある。それがつまり衆生、人間の集りから出來て来るものである。さういふやうに國が出來ますと、その國といふものが又對立して居る。だから「國士世間」にな

さうしてその國が成立つのに人間だけでは成立たない。第一土地がなければならず、草もなければならず、木もなければならず、有ゆるもののがなければ國といふものは成立ちはしませぬ。それだから人問といふものが世の中に存在するのに、人間以外のものと相助け合ふて居るのだといふことも忘れてはならない譯であります。人が人だけで生きて行かれないと、人が生きるには人以外のものゝ力がこれに加はらなければならぬといふことが、國士といふことを考へる時には何時でも考へなければならないことがあります。

これは支那の天台大師が大分やかましく言つて居ります。だから佛の教が世の中に弘まるといふのも、國土に弘まるのである。國に弘まるといふのは鉛々の家の内に弘まることである、個人が集つて家をつくつて、家が集つて村や町になる、その村や町が集つて國になつて居る。その個人々々が佛の教を信す

るから、その家といふものが信仰を有つやうになりその家が集つた町とか村とかいふものが正しい信仰を有つやうになり、やがてその村や町の集つた國といふものが正しい信仰に依つて立つ。斯ういふことになるのですが、儲てその國が正しい信仰に依つて立つ爲には、人間だけの力ではいけない。人間は土の上に住んで空の下に住んで居つて、物を食べて生きて居つて、物を着て生きて居る。これが皆人の精神生活の助けになる。どんなに偉い人でも食はずに居つて仕事が出来るものではない。どんな勝れた人でも着物を着ないで居つて、寒中丸裸では研究も出来ず、信仰も出来るものではない。さうすればこの佛の教が世の中に弘まるといふ爲には、人間の力だけでなしに、天地の間の有ゆる物の力がこれに加つて佛の教といふものが成立つものであり、佛の教が世に弘まるのだ。斯ういふことになる譯であります。

それが一念三千といふ教の最も中心の思想です。それで人間は人間だけの事をやつたら宜いといふことを隨分佛教の中で言つて居るけれども、法華經をして一念三千といふ教を説く時にはそれだけではいけない。有ゆる物を皆その所に安んずるやうにしなければならぬ。斯ういふ事を教へられるのであります。

そこで人間が人間だけの事を考へてはいけないといふのです。人間以外の事を考へなければならぬ。吾々が人として今日の一日を生きて居るのは、自分だけの力に依るのではない。天地の間の有ゆる物のお蔭を受けて今日生きて居るのだから、人間が人間だけの事を考へてはいけない、人間はどうかして人間以外の物をも保護して安んじて、各々がその所を得るやうにして行かなければならぬ。斯ういふ事を申しますと、結局草でも木でも成佛する、草木國士成佛といふことを考へなければならぬといふのであります。成佛といふことは各々その所に安んじて、有ゆる物が、他の物の爲に虐待されるとか、他の物の爲に迫害を受けるとかいふことなしに、皆その所に安んじて、天地の間の有ゆる物が皆安らかに、皆平和に完全に生きてゐるといふことを理想としなければならない。人間は人間だけの事を考へてはいけないのだといふことを教へられて居るのであります。

ところで少し話が脱線致しますが、今の吾々にはこれが出来て居りませぬ。今の吾々は、人間同志だけでも互に救ひ合ふといふことは出来ないでせう。僅に自分の家中の者が仲好くするくらいの事は出来るでせうけれども、一切の人間お互に助け合つて、互に救ひ合つてやるといふことは、今の所では出来ない。況して國と國と對立するといふと、理窟も何もなくて、利害損得を以て直に戦争を始めたり何かやつて居る。なか／＼お互が皆助け合つて、皆一緒に佛の性質を發揮するといふやうなことは、只今の

所では前途遼遠と言はなければならぬのですが、と言つて失望するには及ばない。何故なら實際吾々は自分を捨てるといふことを知つて居るのですから、親の子に對する時、子の親に對する時などは本當に己れを捨てるといふ心持を養つて大きくして行き、されば、世間の人間の關係も變つて行くだらうし、又皆が煩惱の無い、迷ひの無い人間を以て國を組織することになれば、國際の關係も今のやうな浅ましい狀態ではないだらう。だから今直ぐには出来ぬにしても、失望しないで、落膽しないで、マアマアその道に向つて力を盡すといふ事にしなければ、吾々が折角佛の教を學んだ甲斐はないといふことになる。一足飛びにはなか／＼行かないのですから、氣を永くしなければいけないけれども」と言つて『何れその内』ナンと言つて、たゞ氣を永くして居つたのでは、いつまで經つても善くなりはしないか

ら、懶けてはいかぬ。焦つてもいけないが懈けてもいけないので、一步々々と堅實な道を歩いて行かうといふこの心持は失はないやうにして、さうして佛の教が世に弘まるやうに努めなければならない。これは人間だけの事ですが、今度は人間以外の事を考へたらどうだらうか。これも今の所では済まないことであつて、吾々は人間として人間以外のものを隨分酷い目に遭はして居るのです。魚を食べると言つて、魚の方では別に死にたくはないだらうけれども、その魚を網で掬つて来て、鹽焼にしたり、刺身にしたりして食べて居る。牛肉を食べると言つて、牛は殺されたくはないだらうけれどもそれを屠つてビフテキにしたり、シチューにしたりして食べて居るといふやうな譯でありまして、今の吾々は済まぬことであるが、人間以外のものを救ふところの騒ぎではない、人間以外のものに迷惑を掛けて、累ひを掛け、自分の生命を繋いで居るのです。こ

の事は済まないこと、思はなければならぬ。當然の事だと思つてはいけない。佛の教は慈悲が本ナンである、慈悲といふものは弱いものを壓迫するのが慈悲ではない、どんな弱いものにでも、どんなにつまらないものにでも力を添へて、安らかに存在させるのが慈悲でせう。その慈悲を教へられた吾々が、人間より弱いものを虐めて生きて居つたのでは、どうも慈悲が徹底しない譯です。これはつまらない問題のやうだけれども能く考へなければならない。尤も草や木は自然に葉が落ちたり枝が折れたりするのでこれは感覺が無いものゝやうでありますから、穀物だの野菜だの、さういふものは食べても、これは苦痛は與へないでせう。感覺が無いから、感覺の無いものには苦痛は與へないでせう。併ながら鳥にしても獸にしても魚にしても虫にしても、感覺の有るものと捕へて殺せば苦しいに相違ない、怨むに相違ない。怨ましてそれを食つて、さうして慈悲を說いた

ところで、これはあまり徹底しない話です。

こんな事はくだらない理窟のやうだけれども、私は痛切に感ずるのです、私の懇意な者が動物愛護會といふ會を作つて居る、牛や馬を虐待しないやうに、良い習慣を作らうといふ、或は犬や猫などもあまり酷い目に遭はせないやうにしようといふ趣意である。私にも賛成しろといふことであつた。成程聽いて見れば尤だ、随分田舎などに行つて見ると牛や馬を酷い目に遭はして居るのもあつて、他から見ても本當に心が傷むやうな事が多いから、成程動物を愛護する習慣を世の中に弘めて、さういふ残酷な事を減すやうにしたら宜いだらうと思つて、私も大に賛成して、それで私は私も會員にならうと言つた。さうしたら何月何日に會があるからやつて來いといふ。何處でやるのだと言つたら神田の淡路町の寶亭といふ西洋料理屋でやるといふことで行つた。行つたところが西洋料理ですから、ハムも食べればシチュー

も食べる、ビフテキも食べる。そこで私はどうも變な感じがしてしまつた。動物愛護會で馬を酷い目に遭はしてはいけない、犬でも猫でも可愛がれといふことを散々言つて居つたのに、牛肉を食つて豚肉を食つたのでは譯が判らない。虐待してはいけないけれども殺しては宜いといふ、そんな馬鹿な事はありはない。どうもこれはおかしい、世の中に随分矛盾も多いが、こんな矛盾を明かに見せつけられたことはない。一時間前には動物愛護と言つて、一時間後では牛肉を平氣でムシャ／＼食つて居る。何の事が私にはそういうふ會に出ないのでありますか、甚だ卑怯のやうだけども、考へて見ればおかしいではありませんか。動物を愛護しろと言ひながら動物の肉を食つて居つてはテンで話になります。併し人を攻撃して見るものゝ、私共銘々もそれを

やつて居るのです。これを一體どう解釋すべきですか、大變話が脱線したやうですが、この事は能く考へなければならぬ事である。そこでこれは空想でありますか、私共の空想する所に依ると、人間の智慧が進めば、生たものゝ生命を奪らないで自分の生命を持つて行くことが出来るでせう。これは無論科學の力に俟たなければならぬ。私はいつでも宗教といふものと科學といふものとは喧嘩をしてはいけないといふことを言ふのですが、科學の力でだん／＼研究して行けば、そんなに魚の肉を食べないでも、他の生きて居るもの苦しめないで、立派に人間の生命が保つて行くだけの研究又實行といふものも出来て行く筈でせう。そこまで研究を進めなければいかぬ。さうすれば他の生命の有るものも惜しまれぬ。それで又人間が他の動物を惜まないといふことになると、他の動物も人間に對して害を加へないやいでも吾々は立派に生きて行かれるのです。

うになるといふことが考へられる。これは自分で経験したことではありませぬが、さういふ經驗をした人の話に依りますと、山の中に行つて熊などに出会つた時、優しい顔をしてボンヤリ立つて居ると熊は決して飛び掛つて來ないさうです。熊だとと思つて用心して身構へたりするから、向ふでも危いと思つて飛び掛つて來る。それは山歩きをする人が始終言ひます。兎に角こつちが敵對の心持を少しも有たないで優しい顔をして居れば、他の猛獸といふものは飛び掛つて來るものではないといふことです。私は朝鮮に幾度も行きましたが、朝鮮でもさういふ話を聽きました。虎などでもこつちが難かしい顔をして睨みつけるから飛び掛つて來るので、こつちが優しくして行けば虎は飛び掛つて來ないといふことであつた。多分さうでせう。ところが人間が先祖代々他の動物を殺す癖を附けて居る。他の動物の方では人間といふものは酷いものだと思つて居るでせう。

マア話が出來ないから判らぬけれども、モウ何百年來、何千年來、動物を虐待して殺して居るから、向ふは人間といふ奴は酷い奴だと思つて、人間の姿を見れば飛び付いたり、吠え付いたりするのでせう。若し人間が他の動物に迷惑を掛けないで生きて居るといふことになつて、それは一年や二年ではいけないが、さういふ状態が續けば、恐らく總ての動物は人間に害を與へないやうになるといふことは言へると思ふ。これは夢を見て居るやうな話ですが、佛の慈悲といふものを徹底的に考へれば、そこまで考へなければならぬ。マア私共今所ではさう行かぬけれども、さういふ時代がキツと來ると思ふ。人間が他の生きものに迷惑を掛けない、他の生きものも人間を敵としない、お互に安んじて、お互に平和に生きて居るといふ時が來なければならぬ筈です。それまでに問へ今所はまだ／＼そこ迄行かないから、こんな事を言つて居る私共も魚を食べたり、肉

を食べたりして居りますが、實と言へば濟まない事

ナンであります。いつまでもこれが續くと思つて平氣で居つてはならない譯でせう。

そこで吾々は濟まないけれどもこの罪を犯して居るのだから、せめては——洵にこれは妥協的の話ですが、せめては他の生きものに迷惑を掛けて居る自分のこの生命といふものを善い事に使ひたい。澤山の生きものを犠牲にして私のこの今日の生命を保つて居るのだから、この今日の生命をつまらない事に使つたのではない。せめてはこの今日の生命を善い事に使つてこそ、他の生きものを犠牲にして居たといふことに幾らか申譯が立つだらう。斯うも思ふのであります。それでこの問題は今の私共としては、その程度で解決して行くより外ないだらう。理想としては、本當に人間と人間とが決して敵にならぬやうにする、人間と他の生きものとも敵にならぬやうにするといふことでなければならぬ。そこ迄

行けば洵にこれは結構であります。それからモウ一つ子供らしい問題ですが、茲に問題があるのは、生きものを虐げてはいけないといふなら、蠅を殺してはいけないか、蚤を潰してはいけないかといふやうな問題が起きて来る。これはつまり問題のやうですけれども、實際吾々に適切な問題です。生きものゝ生命を奪つてはいかぬといふなら、どうだ、蠅が來ても蚊が來ても殺してはいけないかといふことになる。そこで蚊や蚤をその儘にする譯には行かぬから、吾々でもビシャリツとやるのではありませんが、この問題は一體どうだらう。これは人間の衛生思想が進んで世の中が綺麗になれば、こんなものは生いて來ないのである。蠅だの蚊だのが生いて來るといふのは、世の中が穢ないからである。穢ない世の中だから生いて來るのだけれども、世の中の衛生設備が整ふて來れば、そんなものは自然に消えてしまふのであつて決して、生いて來ないから思ひます。

生きて行くやうになるのだ。一つも他のものを憚ましたり、他のものを苦しめたりしないで生きて行かれるといふ時が來なければならぬ。それが所謂寂光淨土、佛の淨土がこの國士に實現されるといふ時であるだらう。マアそれは急には行かぬけれども、やはりさういふ事を理想として、その心持を以て進んで行かなければならぬといふことを考へて宜いと思ひます。

これは一念三千といふやうなことに就て縁の有る事を序に申上げただけのことでありますが、話を元に戻しまして、この法華經を本にしてこれを精しく見て行くと、天台大師の言ふやうな一念三千といふことになります。此處まで行かないで、ただ佛の教をボンヤリ信仰して居るといふのでは本當ではないといふことを、今こゝで日蓮上人が言つて居られるのであります。信仰といふことはいつでも自分の毎日の生活にピタリ合ふものでなければな

らないのであつて、たゞ何だか有難いといふやうなことではならない。大空に虹が懸つて居る、美しくてもその虹はたゞ美しいといふだけで、手を伸ばしてこれを捉まへることも出来ず、歩を運んでその虹の中に歩いて行くことも出来ない。若し宗教の信仰といふものがさういふものであるならば、美しいものではあるだらうが、有難いものではないでせう。たゞ何だか知らぬがボーッとして向ふの岸に見えるといふくらいのものに過ぎない。

ところが宗教といふものはそれではないのです。吾々が實行の出来る事ナンです。譬へて言へばこゝに高い山がありまして、麓に大勢の人間が並んで居る。さうしてこの山を見上げて、これは遠も高い山だが、この山の上に登つて見たいと思つて居るのだけれども、この途中に坂が多くて、又木や何かと茂つて居るから、この山にどの道を歩いて登つたら宜いか判らない。そこでお互は顔を見合せてボンヤリ

して居るのです。ところで或る一人の非常に勇氣もあり智慧もある人が、この隠れた道を索ねて、この草や木を分けて攀ち登つて行つて頂上に立つて、さうして大勢の人に呼び掛ける。「オイ、登つて來い、お前達の知つて居る通り、自分はお前達と一緒にその麓に居つたのだが、この道をだん／＼分けて索して來ると、山の上に來る道があるのだ。その道を歩いて自分は頂上に登つたのだから、お前達も自分の歩いて來たこの道を歩いて來れば、キット頂上まで來られるのだ、オイ、そんな處にボンヤリして居ないで登つて來い」斯う言はれたら非常に嬉しいでせう。何故なら自分と同じ麓に居つた人が上から呼び掛けるのだ。これが天から何か降つて來て山の上に立つて「オイ、登つて來い」と言ふのでは、それは心細い。登れるか登れないか判らない。自分達と同じ所からこの道を分けて行つて登つた人が、「登つて來い」と、斯う言ふのですから、これは有難いこと

で、又當てになることでせう。

佛教はそれなのです。佛様はもと凡夫であつて、吾々と同じところの迷ひを有つて居る、吾々と同じ悩みを有つて居るその佛様がだん／＼修行して、修行の結果心の迷ひが無くなつて、覺つて、さうして吾々に向つてお前達も自分の歩いて來た道を來るが宜しい。自分もお前達と同じやうに迷ひを有つて居つた者だが、だん／＼修行して行くと迷ひが無くなつた。お前達も今は凡夫だけれども、その凡夫の境界に安んじないで進んで修行して行けば、今自分の居るところのこの境界と同じになれるのだ。就てはその迷ひを除くにはどうするかと言へば、斯ういふ風にするが宜い。その迷ひを除いて覺つた境界に入るのは斯ういふやり方をしたら宜いといふので、佛様が凡夫であつた昔からの事を打明けて、凡夫の境界を離れることをお説き下さるのでありますから、そこで佛教といふものは非常に有難い。吾々に適切

な事だから、一步々々とその佛様が歩いて行らつしやつた後を附いて歩いて行きさへすれば、今は麓だけれども、やがては山の絶頂に達しやうといふのでありますから、これは非常に有難いのであります。それで宗教もいう／＼ありますけれども、佛教は殊にその點に於ては一種の特色を有つて居る。例へば耶蘇教或はマホメフト教、孔子の儒教といふやうにいろ／＼ある。それは皆それ／＼尊い價値の有る教である。ところがその教を説き創めた人が、どうして迷つた境界から覺つた境界にまで行つたかといふことをスッカリ詳しく打明けて居られる例が無いのです。例へば耶蘇といふ人はガリレヤの大工の子供であつて、三十歳になるまでは親父の手助けをして居つた。ところが三十歳過ぎてからいろ／＼深く考へて、自分は神の子であつて、この世に送られた者であるといふ自覺を得て、さうして教を弘めたと言ふ。その耶蘇の教を讀んで見ると非常に立派な教

です。私は自分では佛教を信じて居りますけれども耶蘇の教を讀んでつまらないとは思はない。洵に立派なものである。併しその耶蘇が、普通の大工の息子から神の子といふ自覺を得るまでに、どれだけの道筋を通つて來たか、どういふ修行をして、どういふ考を重ねたかといふことは耶蘇は打明けて居ないのです。たゞ神の子だといふ自覺を得たと言つて居る。それだから吾々は耶蘇の教も尊いけれども、どうしたらこの教に附いて行かれるのかといふ疑問を起した時に、何だか心細くなつてしまふ。ハツキリその道を示して居ない。

孔子はそこへ行くと甚だ忠實であつて、『十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知る』といふやうな風に、自分の相當な年頃に就て心の遷り方を能く示して居られる。これは洵に有難い、併し十五にして學に志し三十にして立つまでの間に、いろいろ迷ひもあつた

らうし、苦しみもあつたらう。立つといふのは自分の方針をしつかりきめて動かぬことですから、學に志してから方針をきめて動かぬまでの間に、随分煩悶もあつたらう、疑問もあつたらう、心の悩みもあつたらうが、それ等の事に就ては少しも教へて呉れてない、一つも打明けてない。たゞ三十にして立て四十にして惑はないやうになるまでの間には随分いろ／＼な曲折もあつたでせう、いろ／＼な煩悶もあつたでせうが、どうも少しも打明けて呉れて居ない。

ところがお釋迦様は前に申したやうに、自分の通つて來た道をスッカリ打明けて、斯ういふ迷ひがあつた、斯ういふ境界にあつた。それから斯ういふ風に修行して覺つたのだといふことを打明けて、さうして吾々に向つて凡夫の境界から佛の境界に進むべき道をお教へになるのでありますから、これこそ本

當の大慈大悲と言ふべきであります。  
さういふ慈悲の心持が法華經に最も能く現れて居る。それを本にして今の大台の一念三千といふ思想が出來て来る。凡夫でも佛に成る種は有るのだ、その佛に成る種を養つて行きさへすれば、今は凡夫であつても、今は地獄に墮ちるやうな事をして居つても、餓鬼道に墮ちるやうな事をして居つても、結局修行して行けばやがて佛の境界に近づいて行くのだ。それはたゞの理論ではない。お釋迦様が身を以て吾々にお手本を示して居らつしやるのだから、その後を附いて行けば出来ないことはないぢやないか。斯ういふ事が説かれて居るのであります。洵に釋尊のお慈悲の廣大であるといふことは、今更ながらに有難く思はれるのであります。

どころが序にモウ一つ申したいのは、山の上からお釋迦様が『登つて來い』と仰しやるのだから、吾も奮發してこの坂を登つて行く。その登つて行く時に茲に二つの困つた事が出來て来る。一つは幾ら登つても、登つても、なかなか頂上に行かれいかれてしまふ。現に私自身などは法華經を読み始めてから二十何年経つて居るけれども、少しも覺りは開けはしない。人の前で一通りの説明ぐらゐ出来るけれども、自分の心を省みるとやはりこの凡夫でありますから、どうもこれは心細い、こんなに永く掛つて少しも先へ行かれないのかと思ふと、嫌になつてしまふ。そこに懈怠の心持が起きて来る。それから又嫌にならない明るい氣分の人は、その弊を言ふと、自分が麓から少し登つて来ると、その登つて来たことに非常な得意を感じてしまふ。先の事を考へない『マア兎に角此處まで登つて來たから偉いものだ』と麓の奴が小さく見える。『こつちは偉いのだ』斯ういふ風に得意を感じるといふ一つの弊害もあるのであります。これがつまり懶慢です。これは戒しめなければならぬ。先が長いからと言つて解

怠の心を起して、モウ嫌になつたら止めようといふやうなことでもいけないし、又少しばかり世の中より善くなつたからと言つて懶慢の心持を起して『どうだ偉いだらう』といふやうなことになると、やはりそれでも気が緩みますから、それから先に進むことは出来ない。いつでも戒めなければならぬのは懈怠の心持と懶慢の心持であります。少しばかり進んだといつても何も誇るに足ることはない。併ながら兎にも角にも修行して行けば一步々々と進めるのだから、これは有難いと思つて懶ける心持は起してはならない。決して自ら懶つてもらはんし、又自ら懶けてもならない、これは兩方なければならない。だからいつでも自ら省みて有難いと思ふ。洵に自分は佛の教を学んだお蔭に心が明るくなつて來た。佛の教を學ばなかつた時よりは幾らか心が明るくなつて來たといふことに心から感謝して有難いと思ふ。と共にまだこれから先が大變だ。少しは自分も解つた

やうだけれども、佛様と比べて見ればなかなか容易ではないといふので、一方に自ら喜び、一方には自ら戒め、さうして一步々々とこの山坂を登つて行かうといふのです。それがどつちにか偏り過ぎるといけませぬ。ガツカリしてしまふと嫌になる。それから自惚れてしまふとやはりそれでお終ひになりますから、いつでもこの兩方は忘れないやうにして行かなければならぬ。それが菩薩たる者の心懸けであります。

だから日蓮上人なども始終さういふ兩方面があります。一方から言ふと法華經を弘めるやうになつたから洵に有難い。「大覺世尊かはらせたまふ」この頭には佛様が宿つて居らつしやるのかナ、ア、有難い。斯ういふ喜びの心持があり、一方に於ては、けれども自分はこのくらゐの事ではいけない。まだ自分は名字の凡夫である。名字といふのは、佛教の中の言葉を一通り辨へたくらゐの凡夫である。自己の用意はなければならない。たゞ何だか知らぬけれども人間が佛に成る……といふやうなことを漫然と考へて居つたのでは、これは本當のものになりませぬから、この念一三千を考へるに就てこれだけの事を併せてお互に考へて参りたいと思ひます。

その一念三千といふことを一通り考へるに就て、法華經といふものに就ての深い研究をしなければならぬ。そこで文の底に沈めたといふことがあります。法華經の本文の底に有るところの意味を考へなければならぬ。これから少し先に「本門壽量品の文の底にしづめたり」とあります。これが「文底秘沈」といふ言葉の出處です。文底秘沈といふのは、言葉の蔭に言葉で言へない意味が含まれて居る。斯ういふ事で文章の底に沈めてある。壽量品を讀んで見ても一念三千といふことはありはしない。けれども壽量品を本當に味つて見るとさういふ意味が有るのですから、天台大師は文底秘沈と言つて、壽量品の文

分はまだこのくらゐのことで佛に成つたとは思はない。自分は名字の凡夫である。モツとこれから修行を積んで、本當に生命に懸けてこの教を弘めたならば、その功德に依つて後の世は佛に成るかも知れないけれども、今の時はまだ凡夫だといふ考を捨て、居はしない。一方から言ふと、非常に大きな希望を有つて自ら當つて居りますが、一方に於ては自分をつまらない者だと考へるといふことを忘れては居られない。これが非常に尊いことです。吾々もさうでなければならぬ、自分が佛の教に依つて修行し得るこの喜びを有難いと深く感じなければならぬと同時に、まだ自分は凡夫だ、これから大に修行しなければ佛の境界には到達が出来ない。斯ういふ風に考へまして、一は自ら戒め、一は自ら勵まして、さうして一步々々と登つて行くのであります。

今一念三千といふことを言ふに就ては、これだけ

章の底に沈めてある。言葉で現されなかつた事を考へ出して、別の言葉で説明をしたといふのが、これが文底秘沈であります。これは天台大師だけの事だと思つてはいけない。吾々はいつでも文底秘沈のものを捉まなければいけない。法華經を讀むといふことは非常に尊いことだけれども、如何に言葉を盡しても言葉では心持は言ひ盡せない。如何に文章をうまく書いても、文章ではその心持は言ひ盡せないのであつて、その言葉とか文字といふものはその精神の一部だけを現はして居る。だから何か言葉が解つたら宜い、文章が解つたら宜いと思つてはいけない。その文章その言葉に頼つて文底秘沈、言葉にも文章にも言へない深い意味を捉まへ自分のものとしなければならない。だから静かに考へなければいかぬのです。無暗に本を澤山讀んでも少しも覺りが開けるものではない、一生涯に自分の背より高く積み上げるほど書物を餘計讀んでも、粗末に讀んで読み

敵にしたならば、何の力にもなりはしない。ホンの一部か二部の本を讀んでも、そこを本當に讀んで本當に考へて、所謂文底秘沈、言葉に言へない所を捉まへれば、それは自分の大きな力になる。斯う考へなければいけない。

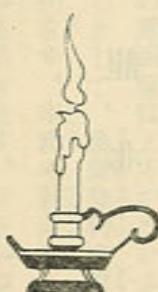
それだから佛教の修行をする者はいつでも

修思聞聞思修

をやらなければいけないといふことを教へられて居ります。先づ教を「聞」く。聞くといふのは今では本を讀んでも宜しい譯ですが、教を聞いて、それから「思」といふのは考へる。たゞ聞き放しではいけない。いつでもどういふ意味だらうと自分でしつかり考へる。それから今度は「修」と言つて實行して見る。たゞ考へただけでは仕様がないから少しでもやる。成程こゝだナと思つた事を實際やつて見る。

居る間に、自ら自分の心が明るくなりまして、いつ覺つたナンといふことは解りはしませぬけれども、いつとはなしに自分の心が明るくなつて、自分の心に大きな力が具はる。斯ういふことになる譯であります。(第五講了)

さうするご自分のものになります。だから聞から思が出て来なければならぬ。思から又修が出て來なければならぬ。能く聞いて、能く考へて、さうしてその一部分でも實行して見るのです。實行して見て、それで満足だと思つてはいけない。實行して見るとまだ／＼足りないと思ふから、又初めに戻つて又教を聞くのです。聞と思と修を始終繰返す。教を受けでは考へて實行して見て、まだ實行が足らないから又教を聞いて、それを考へて又それを實行して見る。聞と思と修を始終繰返してやつて行くのです。吾々の一生涯はこの繰返しで終ります。これを繰返さないで、たゞ聞だけで徒に澤山本を讀んで解つたといふだけならば、それは物議りにはなるだらうけれども、その人の行ひといふものは一向立派にならない。又教を聞かないで一人で考へて居れば、自分勝手な考ばかり起つてしまつて、善い行ひは出來はしませぬ。いつも聞と思と修を繰返し／＼やつて



日付正説御會式の月に際して、我宗門の詩僧と仰がる兩師から、此の詩詠を戴いて轉た感深いものを覺ゆる。——滿生——

## 拜讀什師置文

成 島 龍 北

聖祖滅後法泉紛。

誰攀莫耶拂黑雲。

獨在置文燐發耀。

什門千古薰蕕分。

## 次龍北詩宗瑤韵却呈

山 根 青 村

六門跡皆醜紛々。

小我論爭捲闇雲。

玄妙什師高識見。

置文一擗正名分。

## 年初に當り立正安國の精神を憶ふ

陸軍中將 井 上 一 次

私は本多上人に教を受けまして以來殆ど三十年になりますが、平生は御無沙汰ばかり致して居ります。幸にも本日は新年に當會館に参りまして、第一に國禱會に參列しましたことは、私は何より嬉しいのであります。多く新年宴會とか、又他の宗旨のお集りも種々あります、第一に國の安穩を禱る式があるといふことは、日蓮門下のお宗旨に於て極めて顯著な事であります、私は非常に嬉しく思ひますが、さて國の安穩を禱るといふだけでは、今日生きて居る私共として済まないのであります。

先年來所謂非常時といふ事が喧嘩しく唱へられて居りますが、第一に外交の方面では、支那に對して

彼の露西亞のやうな悪い空氣が入つて来てはならぬから、一緒に手を携へて斯ういふ惡風の入らぬやうにしようではないかといふ相談をしかけたのであります。それが、それも十分に纏まり兼ねて居る。一方に於て其の當面の露西亞はどうかといふと、仲々不義理千萬な事をしまして、漁業條約の取極が假の調印が出來たにも拘らず、本當の調印をしないといふやうな不都合な事もあります。さういふ事の爲に、遠く獨逸の國と手を握つて、露西亞のやうな惡風の入ることを豫防する手段方法を講ぜねばならぬといふのと、日獨協定が出來たといふ有様であります。尙ほ國の方に就ては中々重大な問題が澤山あります

愈々今年の正月から各種の増税をして、尙且つ十億圓に近い公債を募つて、軍備の充實をやらなければならぬやうな有様であります。

經濟界の方はどうかといふと、昨今はチヨット景気が好さうでありますけれども、是も只今申す軍備の充實の爲に、兵器製造の仕事が忙しいので、世の中に多くの金が動いて居るといふのが第一の原因であります。併し一方では十億圓も借金をする。ですから今日景気の好いといふのは、畢竟言ふと人の金を借りて来て料理屋で一杯飲んで居るといふやうな状態である。此の空景気に瞞されて、これで景気が直つたなど、思つて居つては大變であります。

斯ういふ時代でありますから、吾々は本當に心を引締めて、日本の國を何處の國よりも立派なものにするといふ事が第一に肝腎である。それが爲には、何をやるにも先づ立派な精神から始めて掛らなければならぬ事は申す迄もないのであります。日蓮聖人

も「先づ國家を禱つて須く佛法を立つべし」先づ立派な國を造らなければならぬと仰せられて居りますが、吾々は立派な精神を以て國を盛んにするといふ心懸が第一に肝要であります。

さて然らば世の中の人の精神がその點で申分のないやうに行つて居るかといひますと、滿洲事變以來大分引締つては居りますけれども、昨今どうも殘念な事が數くない。最近文部省の役人が、日本の學校の生徒の思想がどういふ風であるか、調べて見ようといふので、第一に琉球に行つて小學校の兒童に、琉球だから仕方がないと思つて、それから鹿兒島に渡つて小學校の兒童に聽いて見ると「お金であります」と言ふ。昔は薩摩武士といへば膝の出るやうな短い着物を着て、さうして腕捲りをして威張つて居られた。

それほどに日本人が近頃は何でもかでもお金が大事だと考へて居る。勿論お金は結構なものであります、しかしお金よりもモフト大切なものが我が日本國民の精神に無ければならぬ。それが近頃段々忘れられて來て居るのであります。

モウ一つ是も學校の生徒の話であります。或る時校長先生が倫理の講義をして居つたところが、一人の生徒が欠伸をした。そこで校長先生は非常に怒りまして一人の生徒が起立して「ハイ、それは忠兵衛さんであります」と言つた。何を言ふかと思つて段段聞いて見ると、その生徒の父親が毎日晚飯に一杯飲んでは義太夫をやる、その義太夫の文句の中に「金より大事な忠兵衛さん」といふことがある。それを子供は毎日聞いて居つた。だから文部省のお役人の言ふのは是だなと思つて忠兵衛さんと答へたといふ。その役人も呆れて勿々に東京へ歸つてしまつ

吾は日蓮聖人の御教を旦暮に考へて、先づ自分の心を立派なものにして、國家の爲に出来るだけの御奉公をしなければならぬと考へるのであります(拍手)

の力を以て肉體の弛緩に打克つて行くことが肝要だと教へられたものです。ところが近頃の學生は何でも理窟さへ合へばそれで宜い。所謂科學萬能といふやうな考が、校長先生の前で平氣でさういふ答をするやうになつて來た。

是も結局外國から入つて來た物質本位、科學本位の考が段々に浸潤して來た結果であります。物質本位、科學本位も決して悪い事ではない、また是があつて世の中の進歩も出來て行くのでありますけれども、我が日本に於ては更に一層大切なものがあります。其の立派な精神が段々薄らいで行くといふ事は、眞に憂ふべきことであります。茲に於てか斯ういふ時代に最も必要な事は、先づ立派な精神を養ふ事です。それにはどうしても正しい教に依らなければならぬ。日蓮聖人の仰せられた「正しきを立てゝ國を安んずる」之を忘れさへしなければ間違ひはないのです。斯ういふ時代に於てこそ、吾



## 國士を以て任せよ

本門法華宗 三浦精翁

今日の日本の現状が非常に憂慮すべき状態であるといふことは、只今も色々お話のあつた通りであります。さて然らば之をどうして行くかといふ事が實際問題として非常に重要な事柄になつて來ると思ひます。

それには勿論學校教育の必要といふこともあります。併しこれは或る意味から申しますと既に試験済だと思ひます。言ふ迄もなく明治五年に學制が布かれ以来今まで學校教育は非常に進んだ、日本人の學力が非常に進んだといふ事は、何人も否定することは出來ません。併し其の間に本當の魂を與へることが出来たかどうかといふことに就ては、多大

そこでどうしたら宜いかといふ問題になつて来るのであります。勿論これは教育の方法を變へなければならぬといふ事も、何人も異論の無いこと、思

ひます。それと共に、私共は蓮聖人の教を奉する者と致しましては、殊に寺院、教會所、其他社會教育家といふやうな方々が、澤山の人を集めて講演をされるといふ事も必要でありますけれども、私はモウ一つ突込んで、各家庭で、三人でも五人でも、極端に申すならば一人でも、自分の話を聞いて呉れる者があれば其處に行つて話を聞く、先づ一人からやつて行くのだといふ立場に立つてやつて行く事が必要であると思ひます。是は言換へれば家庭教育といふことになつて参らうと思ひますが、今日お集りの中にも御家庭のお母様方も大分お見えになつて居るやうであります、先づ自分の家庭を善くして行くことが必要ではないかと思ひます。私は二千五百九十七年の新年を迎へまして、本年の目標と致しましては

先づ家庭に向つて、吾々の御縁のある所から戸別的に出来るだけの力を盡してやつて行きたい。聲を大切に申すならば一人でも、自分の話をして聞いて呉れる者はあるべきだといふ立場に立つてやつて行く事が必要でありますけれども、私はモウ一つ突込んで、各家庭で、三人でも五人でも、極端に申すならば一人でも、自分の話を聞いて呉れる者があれば其處に行つて話を聞く、先づ一人からやつて行くのだといふ立場に立つてやつて行く事が必要であると思ひます。是は言換へれば家庭教育といふことになつて参らうと思ひますが、今日お集りの中にも御家庭のお母様方も大分お見えになつて居るやうであります、先づ自分の家庭を善くして行くことが必要ではないかと思ひます。私は二千五百九十七年の新年を迎へまして、本年の目標と致しましては

先づ家庭に向つて、吾々の御縁のある所から戸別的に出来るだけの力を盡してやつて行きたい。聲を大切に申すならば一人でも、自分の話をして聞いて呉れる者はあるべきだといふ立場に立つてやつて行く事が必要ではないかと思ひます。私は二千五百九十七年の新年を迎へまして、本年の目標と致しましては

（開目抄）との信念に住し、國運の隆昌は國民思想の良否にあるを以て「先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし」（立正安國論）  
『されば法は必ず國を安みて弘むべし、彼國に好かりし法なれば、此國にも好かるべしと思ふべからず』（南條抄）と、宗教識別の肝要、布教の大旆として推し立て、「此れ偏に國土の恩を報ぜんが爲なり」（安國論由來）之が爲めに身命を惜まずとて、『身命を捨棄して國恩を報せんとす』（奥義仁書）この大忠を表示せられた。然るに現今の世相を觀するに「世皆正に背き、人悉く惡に歸す、故に善神國を捨てて相去り、聖人所を辭して還らす」（立正安國論）『故に萬民亂る』（顕立正意抄）と深く慨嘆せられた。

今皇紀二千五百九十七年の元頭に際し、現實の世相と對比して感慨無量、大動王者、日蓮聖人の遺著を引用して、同信の士とともに更に「國を扶けられた。

にして大講堂で叫ぶといふことも善い事でありますけれども、モウ一つ戸別射撃と申しますか、それをやつて行かなければならぬ。さうして今日の難局を切抜けて行くのには、お互が左様な氣持に於てやつて行きたいと考へて居る次第であります。尚ほ最後に、私は新年に方りまして日蓮聖人の教を奉する者の一人と致しまして、此の非常時に對する自分達の覺悟と致しまして、「各々國士を以て任せよ」と題して、日蓮聖人の御妙判を綴り合せて自分の氣持を現はしたものがありますので、それを御披露致したいと思ひます。

『日蓮生を此の土に得たり、豈吾國を思はざらんや』（昨日御書）との一大決心の下に「但此國の安泰を存する計なり」（興長樂寺書）とて、さらに『一切の大事の中に國の亡ぶるは第一の大事なり』（蒙古使御書）とて、「我れ日本の柱とならむ、我れ日本的眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ」

人が爲め、生國の恩を報せん』（撰時抄）と、懸命の努力を致して「速に實乘（正義の教）の一善に歸せよ……國に衰微なくば……身は是れ安全にして心は是れ禪定（不動の心）ならん』（立正安國論）の國家に改造し、還元したいことを念願して止まざるものである。



## 南洲の遺訓

小林一郎

五〇

私は今年の新年に方りまして、今年は丁丑の年だ  
ナと思ふと共に思ひついた事があります。自分の一  
身の事を申しては如何でありますか、私は明治九年  
に生れました、丙子の年で、昨年と同じ年に當りました  
す。私の生れた次の年が明治十年で、西郷隆盛の戦  
争がありました。私は二歳の赤ん坊でしたから無論  
知つて居る筈はありませんが、私共の育つ頃には殆  
ど毎日のやうに西郷さんの話を聞かされて、子供心  
に覚えて居ります。其の後色々の話を聞いて、西郷  
南洲といふ方は色々な點から偉大な人であつたとい  
ふ事を常々感じて居るのです。それで今年の元旦に、あゝ今年は丁丑の年だ、明治十年の戦争と

同じ年だナといふことを思ひついた。それから西郷  
さんに關係のある品物などを取出して、明治十年の  
戦の前後の事を調べて見たり、又私が人に聞いた話  
などを覚え書に記して置いたものなどを比べ合せて  
見まして、今更ながらに大きな教訓を得た事を感ず  
るのでです。

それは種々ありますが、私は殊に二つの事を感じ  
た。一つは、西郷南洲其の人が如何にも私の心持の  
無かつた人だといふことであります。是は色々な點  
から言へますが、特に私の感じましたのは、薩摩か  
ら兵を起して熊本の城を囲んだけれども、遂に熊本  
城が取れない。それから道を轉じて日向の方へ行つ  
るのです。

て官軍と戦をして敗々負けて延岡に行つて、延岡で  
も負けてしまつたので、モウ是は仕方がないといふ  
ので、峠を越えて故郷の薩摩に歸つたのであります。  
其の西郷さんの越えられたといふ峠の邊りも、  
私は延岡に行つた時に人に案内して貰つて歩いて  
見たのであります、延岡の近邊で言傳へた所に依  
ると、西郷さんが戦に敗けて、モウ仕方がない、故  
郷に歸つて死ぬのだといふ覺悟で日向の峠を越える  
最中に、自分の左右の者を顧みて『どうも日本の陸  
軍は強くなつたナ』と言つて感嘆の聲を發して居る。  
家來の者は驚いた、今自分達が敗々な目に會はされ  
た相手を褒めて居るのですから、驚いて『エフ?』  
と言つて不審に思つて居る、西郷さんは又同じこ  
とを言つて『どうも日本の陸軍は強くなつたナ、日本  
の陸軍を斯ういふ風に作り上げるのには自分達が  
骨を折つたのだが、自分達の骨折は無駄ではなかつ  
た。日本の陸軍は強くなつた。是だけの陸軍を持つ

て居れば、是から後外國ご事があつても心配は無い  
だらう、あ、結構な事だ』と言つたので、側に居る  
者は實に呆氣に取られてしまつたといふことであり  
ます。これは自分の一身から言へば殘念な事でせ  
う、折角兵を擧げて其の目的が達せられないで、死  
に歸るのでありますから、是ほど殘念な事は無い  
い。併し國の前途を考へて、自分を負かした其の陸  
軍の強い事を心の底から感嘆したといふ此の心持、  
これは實に偉大事であると思ふ、人々が斯ういふ  
やうに自分の私を捨てゝ、唯々國の爲といふ心持に  
なるならば、先刻からお話のあつた國難を打開する  
といふ事も決して難かしい事ではなからう。事柄は  
時代に依つて變りますから、過去つた昔の人の通り  
眞似する譯には行きませんけれども、心持は此の心  
持であるべきであらうといふ事を、痛切に感じたの  
であります。これが一つです。

モウ一つは、是は書物ではよく判りませんが、延

の方で聞いたり、又最近に至つて其の戦争に關係をしたといふ老人などに聞いたのであります、あの時西郷さんが鹿児島へ歸るといふことは、本當は出来なかつた事ださうです。西郷さんの方の軍隊はスワカリ弱つてしまつて、官軍は強大な力を以て之を囲んだのですから、彼處で西郷さんを喰止めれば確に喰止められた筈であるといふ。それがどうして故郷の鹿児島まで歸れたかといふ事は面白い問題ナ

ンです。恐らくは官軍の中に、此の偉大な人を途中で殺すに忍びない、死ぬのなら故郷に歸して死なしでやりたいといふ情けから、此處で押へられる其の手を緩めて國へ歸してやつたのではない、斯ういふ解釋があるのであります、私は武士の情として斯くもあつたであらうと感するのであります。何でも宜い、やつつけてしまへといふのではない。兎も角維新の功臣である、日本の國に大きな力を盡した人だから、モウ死にに歸るのだから歸してやらうぢ

の武士の道を重んじて居つたからこそ、彼の維新的大業も出來たのではないかといふことを感じます。

その維新的大事業を成した心持が、まだ／＼僅か十年でありますから、其の頃には遺つて居つたのであらうと思はれるのであります。

其の頃に比べれば、今日はまるで生れ變つた時代のやうに、物質の方の文明は進んで參りました。しかし日本の國民が、其の維新的頃から明治十年の頃ままで傳へたやうな、己れの私を捨てる、敵にも情を掛けといふ、此の大きな、澗々とした心持を、其の時の通りに持ち傳へたかどうかと考へると、私はありません。皆が自分を捨てなければ本當の事は出来はしません。これを佛教に於て教へて居る。大乗の佛教が慈悲を本にするといふ事は申す迄もないのに本は己れを捨てるといふことです。小さい自分を捨

やないか、途中で死なしてはあまり氣の毒だといふ、これが眞の武士の情でありませう。その心持から西郷さんは歸られない故郷に歸つて、静かに自刃することが出来たといふ話であります。

此事も私は非常に尊い心持である、日本人は斯ういふ心持であるべきだらうと思ふ。決して西洋の事を悪く言ふのではないが、西洋人は敵となれば飽まで敵です、どこまでもやつづけてしまはなければならぬといふ事になるのは、西洋の戰の歴史などを讀んで見ても判ります。日本の武士といふものはさうではない、敵にも情を掛けてやるといふのが日本の武士である。其の日本の武士の情といふ事が、あの時分の官軍の態度に依つて現はれたといふことは、私は非常に面白い事だと思ふ。維新的大業を成し遂げたといふことは、明治天皇の古今に絶する御盛徳に依ることは勿論であります、その明治天皇をお輔け申した人が斯く私を捨て、また斯の如く眞

てないで人を救ふことの出来るものではない。誰でも親切を盡す位のことはしますが、親切を盡して、「俺が親切にしてやつたのだ、有難いと思へ」といやうにのさばつては、折角の親切といふものは何にもならなくなつてしまふ「俺が／＼」といふ心持で人を救ふ、世の中に盡すといへば、其の善い行ひは却つて怨恨の本になり、却つて世の中に累ひを作る本になる。今日國難とか非常時とかいろいろ／＼言はれて居りますが、根本に於ては私は此の自分を捨てるといふ事に皆が目を覺まさなければならぬのであらうと、ツク／＼思ふのであります。

斯ういふ點に於て、日蓮聖人の教を奉する私共は、日蓮聖人の昔に復らなければならぬ。日蓮聖人は、何時でも其の事を言つて居られる、自分は何も一つの宗を開かうといふのではない、自分が一派の祖師にならうといふのではない、たゞ國の爲である、たゞ一切衆生の爲である、自分といふものは少し

も考へないのだいふことは、幾度となく繰返して教へられて居るのであります。私共は此の精神をシツカリと捉まへて自分のものに致さなければ相成らぬと考へます。幸にこちらは統一園であります「統一」といふことは別の言葉で言へば私を捨てるといふことです。自分を固執して居つて統一は出来やしない、「サア誰か俺の周圍に寄つて來い」と言つても寄つて來ない。自分が先づ自分といふものを捨てゝ掛らなければ、人といふものは統一は出来るものではない。此の統一といふ名のある會館に於て國體をなさつたのでありますから、皆さんはどうか此の事をお考へ下さつて、小さい自分の私を一切捨てゝ、たゞ國の爲、人の爲に佛の教を世に弘めるといふ大目的に向つて邁進しようといふ御決心をおつけ下さるやうにお願致したいと思ひます。(拍手)

## 念 告

左記の通り本部會館第五周年開館記念式典を舉行仕候間御参列相成度此段念告仕候

一日時 二月十一日午後二時開場  
一場所 小石川區音羽町 統一會館  
一法要導師 小西日喜師  
一講演 廣宣流布の意義 小林一郎先生  
一上田理事長 外數名

一清興 琵琶講談宗家 水也田春洲氏

## 心の固さに由て神の護り強し

海軍中將 佐藤臯藏

私はこの機會に事變以來の事柄に就いて皆様と共に自省して見たいと考へます。申すまでもなく、非常時といふ言葉の起つたのは、昭和六年の滿洲事變以後であります。それから後思想方面に於てどういふやうに展開したかと申しますれば、勿論いろいろの變化がありますが、私は軍事方面に最も深き關係の有る事柄を申して見たいと思ひます。

滿洲事件が起つて以來、軍事方面的のみならず、國民一般に非常に緊張して、強い決心を致しまして、或は亞米利加方面から、或は國際聯盟の方面から非常な非難攻撃もあり壓迫もありましたけれども、これを吹き飛ばして自分の所信を貫いて行つた。その

意氣は素晴らしいものであります。これが本當の國家興隆の氣風であると思ひます。さういふ氣風その後だんく衰へて來たのではないかと心配するのではありません。尤も一昨年から昨年初めに掛けて、倫敦に於て軍縮會議が開かれまして、これに對しては日本は決然たる態度を以て自分の所信を貫いて、遂に條約を破棄することになつたのであります。この頃までは幾らか宜かつたやうに思ひますけれども、それから以後に至りまして、私は甚だ面白くなく感するのであります。私は地方にも能く参りますが、いろ／＼の質問を受けます。その一つとして「この頃露西亞の軍備といふものが非常に整つて來

たさうで、日本は戦をする自信が無いさうではありませぬか』甚しきに至つては『日本は決も敵はないさうではありませぬか』といふことを聽かれるのであります。これに對して私は非常に悲んで居るのであります。決してそんなものではない。成程陸軍はいろいろのパンフレットを出し、或は講演者を巡回させて、露西亞の軍備のことをいろいろ國民に知らせて居ります。露西亞の軍備が非常に整つて居る、これに對して日本の現勢力が非常に劣つて居るといふことを言はれるのであります。斯ういふ事を言ふのは、決して現在日本が露西亞と戦をして敗けるといふことを意味するものではないと私は考へる。陸軍當局の方の人は、決して敗けるなどとは考へて居らない。成程露西亞は澤山の軍備を本國に有つて居る。東洋方面にも派遣して居る。併ながら日本やうな強大國に向つて、自信をもつて戦を掛けといふことは到底出来るものではない。露西亞が

きは、如何にも露西亞が豪いもので、戦をすれば直に日本が敗けるものだといふやうに宣傳して居る者もある。殊に屢々防空演習などをやりまして、私は決して防空演習が無益であると申すのではありませんが、さういふ際に、無統制に、知識の無いところの下級の在郷軍人などに宣傳させるから、彼等は、たゞ日本は焼打されるのだといふやうなことを言つて國民を脅かして居る。その爲に國民は露西亞と戦をすれば日本が敗けるものだといふ觀念を今日有つて居るといふことは、これは非常な大失態であると謂はなければなりません。

國民が斯ういふやうな脅怖心を有つといふことは實に恐るべきものであると思ふ。吾々は非常な強い國民性を有つて居りますけれども、同時に實に弱い國民性的一面を有つて居る。多くは申す必要もないと思ひますが、大震災の後に於ける鮮人騒ぎでもどうありましたらうか、吾々の記憶に新なる所であ

どういふ交通路を東洋方面に有つて居るか、西伯利亞鐵道は相當立派になつたけれども、たゞ一線である。あの長い處に立派な交通路も出來て居らない、澤山の軍需品も送らなければならぬのに、さういふ設備も無い。又地方は開發せられて居らないから、食糧品の如きも本國から運ばなければ、現地に於ては得られない。そんな有様で日本と戦をするなど、いふことは到底彼等は考へて居る譯ではない。であるから現在戦をして敗けるなどいふことを、決して陸軍當局こそ雖も言ふのではない。たゞ露西亞は着として鐵道の建設もやり、道路も造つて居る、又東洋方面に軍需品の集積所も造れば、製造所も造るといふことをやつて居るのであつて、この儘に日本が惰眠を貪つて居つたならば大變であるから、國民は一生懸命になつてやらなければならぬといふことを警告して居るのであります。併ながらどうも上の心を下の者が知らないで、或る一部の講演者の如

一體吾々が試合をするにしてもさうであります。斯ういふ國民性の弱點の有る所に、矢張りに國民を脅怖せしめるやうな宣傳をすることは非常な間違ひと謂はなければならぬ。

ります。斯ういふ國民性の弱點の有る所に、矢張りに國民を脅怖せしめるやうな宣傳をすることは非常な間違ひと謂はなければならぬ。

戰の場合には尙更であります。脅怖心をもつて相對しては到底出来るものではない。その點に於て東郷大將の日露戰爭に於ける態度はどうでありますらうか。最初旅順方面の戰が終つて、内地へ歸つて明治天皇の御召に依つて參内をして御下問があつた。今度露西亞の本國から艦隊が来るさうだが、これに對して東郷はどう考へるか』といふ御下間に對して、東郷大將は『これを擊滅致します』と極めて決然たる態度を以て申上げた。御側に居つた人も非常に驚いたさうであります。兎も角東郷大將ごしては少しも疑ひなしに擊滅するといふ自信を有つて居つた。更に日本海の海戰に臨むに際してどういふことを大本營に報告して居るか。皆様も御承知の有

名な報告があります「敵艦見エトノ警報ニ接シ聯合艦隊ハ直ニ出動之ヲ擊滅セントス」再び擊滅といふ言葉を使つて居ります。これは吾々仲間同士の間で『やツつけてしまへ』といふやうな軽い事ではない、大本營即ち天皇陛下に對し奉つて、擊滅するといふことを決然として報告して居るのであります。斯ういふ自信があればこそ、あゝいふ大勝利を占めることが出来た。勿論その爲には非常な準備をしましたけれども、十分の準備をして、自信を得て戦に向つたのでありますから、勝つことが出来たのであります。若しも露西亞が非常に強いものであつて、やつたら敗けるかも知れないといふやうなフランチした腰つきで戦に臨んだならば、あんな勝利が得られる譯はない。これは獨り東郷司令長官のみならず、私共もその一人でありましたが、當時の部下は皆その自信を有つて居りました。戦をして勝つのか、敗けるのか判らぬといふやうなアヤフヤなも

のではない、必ず勝つたゞどれ位勝てるだらうか、どれだけの犠牲を拂はなければならないだらうかといふ心配はあつたのでありますけれども、敗けるなどいふ考は誰も毛頭有つて居なかつた、これは非常に大事な事であります。國民が外國に向つて脅威心を有つて居つて、ヤレ飛行機が飛んで來た、ヤレ何が來たと言つて縮み上がるやうなことで戦が出来るものではない。今日國民がさういふ脅威心を有つて居る者が多いが、さういふことは實に悲しむべき事であると思ひます。日蓮聖人はどうでありますか、蒙古の襲来に向つては非常な警告を國民に與へられましたが、愈々蒙古がやつて来るといふ時になつては、蒙古を恐れるやうなことは一言も言つて居らない。小蒙古が大日本國を襲ふといふ風に言つて居られるのであります。この意氣を以てやればこそ蒙古を擊退することも出来たのであります。今日吾々も決してさういふ自信

の無い、アヤフヤな考を有つてはならぬのであります。併ながらたゞ強がりばかり言つたのは仕方がありませんせぬから、恰も東郷司令長官が、日頃部下を訓練して悉く自信を有させて、戦になつたならば必ず敵を擊滅するといふ自信を、自分のみならず、部下一同に有たせたといふ、さういふ態度を以て事に當らなければならぬと思ひます。これが今日の時勢に處する吾々國民の心得であります。

斯う申しましても呉れても誤解の無いやうに願ひたいのは、私は露西亞を輕んずべしと言ふのではありませんせぬ。前にも申すやうに、露西亞が益々軍備の充實を努め、地方の開發をやつて居ります。これは實に警戒を要するのであります。兎も角吾々としては、昔から言ふ通り『大敵たりとも懼れず、小敵たりとも悔らず』これでなければならぬと思ひます。露西亞は今日の有様に於ては、大敵として吾々が懼れるに足るものでは断じてない。然らば



# 同 師 人 の 覚 悟

和 賀 義 見

六〇

先程來皆様方の尊い御所感を承りまして、洵に喜びに堪へませぬ。所詮佛教の要是、過去の一切を活かし、而して未來を建設するに在るのであります。而も未來の建設も、過去の一切を活用することも、其は現實の吾々の生きる態度に在る。かるが故に茲に明確なる指導原理と、的確なる實踐とをもつて、此の態度に出でなければならぬことを教へられて居るものであると思ひます。顧みてこの數年間居ないものは一つもない。斯ういふ見地から國民精神の問題を再び検討する時に、過去の歴史の事實、

並に世界の事實は私達に何を教へるか。即ちその國民の間に於ける國家意識、國體意識が不明確な時代には、その國の肇國の理想乃至はその國の先祖の神に對する思想といふものが、やはり不明確な範圍を脱することが出來ないのであります。言換へれば我國に在つても、國體意識が明確でなかつた時代の天照大神に對する考へ方が、その他の八幡宮や春日神と同じやうな水平線に置かれて考へられた時代もあるのあります。然るに漸く國體意識が明確にせられて、日本精神の興隆と共に、我が國祖は天照大神に在ます、即ち國家の祖先として國祖神を仰ぎ奉つるといふことになつて參つた。然るに最近になつ

て更に日本精神は非常な飛躍をして居る。軍に相對的に英吉利、亞米利加、露西亞、それと日本といふやうに對立して居る考へ方ではない。日本の國は萬古一貫の尊い國柄であると同時に、東洋亞細亞の盟主となり、世界文明の指導者たらなければならぬ。斯ういふ思想の動きが澎湃として起きて參つた。その國民思想の飛躍は、直に反映して神に對する考へ方を亦變へて參つたのであります。即ち國家といふ範圍のみの神として仰ぎまつることに満足しない。言換へれば世界的な大きい意味合、或は宇宙的な大きき意味合に神を仰ぎ奉らうとする動向が非常に強くなつて參つたのであります。

この事實が測らずも或はゴッドであるとか、或は如來であるとか、さうした偉大な實在として迎へられて居る對象に對して、何となく不満の態度、言換へば邪魔になるといふ考へ方が、それ等の人々の頭腦の中に湧いて參つた。それが我が國體精神と宗

教との間に何ものかの間隙を齎へて、而もその爲に國民精神の根柢を培ひ、その魂を最も立派なものに仕上げるといふ此の大道を忘れ來つたのではない。而してそれが更に或は政權の變化する機會に於て、最も恐しき禍ひを來すやうな虞れなきやを思はしめるものがあります。併ながら按するに我が建國の大精神、神の道は經綸の道であります、高天原を治すその儘に、この豊葦原の千五百秋の瑞穂の國を治すところの道であらせられる。天の闕を開き、雲路を抜け、山驛駆ひ、が故に西の偏りを治す、その間正を養ひ給ひ、我が皇祖皇宗は慶を積み、暉を重ねられて年所を歷た。この恩徳を以て天業を恢弘し、天下を光宅する天津日嗣を弘め、天が下に満ち足りぬべしといふこの御精神は、明かに天下經綸の大道で在らせられるのであります。而も佛教は何を教へるか、それは前

に申すやうに心の問題である。魂の問題である。専門の言葉で言へば生死出離の要法であります。生命の問題の解決であります。寔に佛教はかかる意味に於て廣大なる天地を開拓したのである、この點に於ては法華經を以て無比としなければならない。即ち一方に於ては經縁の範疇に於て神様は無上の尊嚴にわたらせられ、國境を超えて偉大なる光を世界に投げ掛け給ふところの神として仰ぎ奉るに、何の客なる態度を執る必要があるか。併しそれは經縁の大道の上に輝く意味である。而して佛教は生死出離の道である。自ら範疇が劃然として居るのであります。人の生命の問題、宇宙觀の問題を解決するものである。斯の如くにして人の心の問題、魂の問題を正しく導いて、初めて、先程お話のありました無我の精神に立ち得る、立派な生々化育の道を辿り得ると思ふのであります。

さうして磨き上げた精神を以て、この解脱の要道

今日の國家乃至は全人類に向つて、國民經濟のその對策よりも、モット重大なる根本の力を先づ以て開顯し、之を充實し、發揚することに對つて力を注がなければならぬといふことを深く信念する次第で

あります。  
この意味に於て我が統一團も益々陣容を整備して御奉公致したいと存じます。皆様に於ても更に一段の御後援を御願致す次第であります。(拍手)

な心強いお話を聴き、未だ／＼各方面から護法愛國の方々多數に御來會下さつて居ることであるから、若干の御感想を拜聽致したかつたのであるが、豫定時刻も切迫したので、河合講師に依つて論結されべきであつたけれど、都合で和賀講師より別擇の御挨拶を最後として定刻五時開幕となつた。年頭には必ず御臨席の岩野少將が、參加との御返事を戴きつゝ見えにならぬので、何か急用でも起きたこと、思つて居た處、六時頃幹部一同、左様ならんせんとする幹部に「ヤア失敗々々」と歎慨一笑、「時間なソツカリ思ひ違ひをしてしまつて相済みませんでした、折角皆さんにも一言の御挨拶をしやうと考へつて来たのに殘念の事しました」「ナニ居残つて居る者丈けで拜聴したいのです」シムリした二次会が開かれ、歎談に胸襟を開いて、又復有意義な新年氣分にひたり、暮を閉じたのは九時頃であった。正月は新年會が諸方面に開催されお互に極めて忙しいその中を萬障を排除して、本部に多數の方々が御参列になつて、年賀の交換などなことは、幅へに總裁本多日生上人の御功德の賜物と一入感激に堪えな衣次第である。恰度来る三月は、第七周忌に相當するの姉崎博士や、山田博士、佐藤中務や下村及び小林先生其他日蓮門下の各派僧俗四十名が發起され、感謝の記念會が營まるることは必定に有難いことである。男女各方面に於ける會員士女は、語り傳へお説ひ合せて出来る丈け盛大に、その御計畫に賛同御清賛あらんことをお願しておくる。

## 記事

本部團報

新年會 正月に於て暮だつて別に太陽の運行に相違はないではないのか、一休禪師のいふやうに「芽出度もあり芽出度もなし」ぢやと恵り頗る人もあるが、法華の諸法實相親はさうでなく、特に日蓮聖人は、春の初のお覺び自作幸々々と大に祝禱されて居る。同じく「お芽出度」といふ言葉にも、世間の人のいふ「お目出たう」と、法華行者のいふ「お目出たう」とは内容が大いに違ふといふことを憶ふのである。

本團に於ては知法恩國會と俱に一月七日午後二時から、本部講堂にて小西日喜師等大師となつて、和賀、山口、小林等の諸師等と、井上、佐藤兩將軍を始め一同在最な國威法要を虔修し、竟つて三時から穀部掌理事事は、本日緊急要議の爲め出席時間不定の上田理事長に代つて、この丁丑年頭の挨拶を述べ、續いて教務部を代表して小西日喜師は所信を披瀝され、來賓井上中務、本門法華の三浦師、及び小林先生は殿次前掲の御感想を語られ、日蓮宗の栄田一能小野鍊雄兩師も御臨席の御豫定であつたが、時間の關係もあるので小林啓善師に日宗頭から御所感を承り、續いて横濱法華會代表として金子光和氏の熱辭に耳を傾け、それより佐藤中務より別項のやう

謹告

本年三月は本多日生師第七周年忌祥月に相當致候に付同人發起し左記の通り記念會を開催仕り追憶謝恩に擬し度候間御誘合せ御來會相成度此段謹告仕候也

一一一  
行場月  
事所日

小笠原長生氏

(省線一有樂町驛  
市電一日比谷)

請御燒  
遺族正香贊

半時時 樂  
町

有

時時時  
町區

七五四 魏  
曉曉曉

以 上 (いろは順)

井石本龜馬山筮三柴  
村橋多熊豊行三日頭  
日太豐行三日頭熊多  
成甫郎二郎良啓治隆

望清佐山上田堀岩井  
月水藤田田中内野上  
日龍太英辰智良直日  
謙山郎二卯學平英光

井市富高野小佐柴鉛  
上原川島平澤林藤田木  
清玄三悌一皇日一雄能  
純求快郎吾郎能雄

釋佐姉山中小磯井  
藤崎川川笠部上  
梅原長満一  
眞太正智日  
誓郎治應史生事大

下木酒山中緑林井  
村村井根村原上  
壽日日日清賴道  
一保慎東衛行郎郎

十二月十五日 二本松佛教不染社説修行。  
同 同 同 同 同  
廿一日 午後一時五十七分戰死者遺骨  
通過し因つて出迎へ讀經す。  
廿四日 (舊十一月十一日)夜蓮華寺に於て宗祖小松原御法華會修行す。  
卅日 二本松佛教不染會に於ては

團費誌料維持及寄附金領收  
(自昭和十一年十二月二十一日至十二年一月二十日)

至十二年一月二十日

同	同	同	同	十二月十五日
二本松佛教不染持詩修行。	二本松	本	松	本
甘 日 午後一時五十七分戰死者遺骨 通過寸因つて出迎へ讀經す。	松	中	報	十二月十五日
廿四日（舊十一月十一日）於大蓮華寺に 於て宗祖小松原御法難會修行す。	中	本	松	本
卅日 二本松佛教不染會に於ては一 町二ヶ村の貧困者に對して施茶す。	本	松	報	十二月十五日
團費誌料維持及寄附金領收	團	費	誌	團
（自昭和十一年十二月二十一日 至十二年一月二十日）	費	誌	團	費
一金壹圓貳拾錢也	愛知縣	中村新次郎殿	中	一金貳圓貳拾錢也
一金六圓也	東京	尾崎 熊吉殿	東	一金貳圓五拾錢也
一金參圓也	同	森川 泰修殿	同	一金貳圓四拾錢也
一金貳圓也	同	沼部鶴太郎殿	同	一金貳圓四拾錢也
一金貳拾圓也	同	同心會殿	同	一金貳圓五拾錢也
一金八圓五拾錢也	川崎	毛見 春吉殿	同	一金貳圓四拾錢也
一金 參圓也	基隆	崎山 用喬殿	同	一金貳圓貳拾錢也
一金貳圓貳拾錢也	東京	飯島 昭二殿	同	一金貳圓貳拾錢也
一金壹圓貳拾錢也	同	大谷穂次郎殿	同	一金貳圓貳拾錢也
一金壹圓貳拾錢也	山口縣	小野 ワネ子殿	同	一金貳圓貳拾錢也
一金九圓貳拾錢也	盛岡	中村 謙藏殿	同	一金參圓也
愛媛縣	岡本	忠道殿	同	一金六圓也
禪岡縣	廣田	竹吉	同	一金貳圓貳拾錢也
東京	濱中治三郎	照合	同	一金貳圓五拾錢也
富山縣	賀久	嘉義	同	一金貳圓四拾錢也
同	上田	義信	同	一金貳圓四拾錢也
同	松岡銀次郎	士屋 喜久	同	一金貳圓四拾錢也
同	横濱	久保田英挺	同	一金貳圓四拾錢也
同	東京	三須久三郎	同	一金貳圓五拾錢也
同	新潟縣	曇辰	同	一金貳圓四拾錢也
同	千葉縣	小野 鍊井	同	一金貳圓四拾錢也
同	同	梶野 紋七	同	一金貳圓四拾錢也
同	同	旭川 三谷 完吉	同	一金貳圓四拾錢也
同	同	中山 重慶	同	一金貳圓四拾錢也
同	同	市川立正	同	一金貳圓四拾錢也
同	同	東京 鈴木 建因	同	一金貳圓四拾錢也
同	同	大阪 澤田萬春	同	一金貳圓四拾錢也
同	同	萩野 廣三	同	一金貳圓四拾錢也
同	同	深澤 勝吉	同	一金貳圓四拾錢也
同	同	平松 市吉	同	一金貳圓四拾錢也
同	同	渡邊 清吉	同	一金貳圓四拾錢也
同	同	和賀 謙之	同	一金貳圓四拾錢也

右難有入帳仕候也

財團法人統一園會計

六四

月刊「教」誌  
申込所 東京市小石川区音羽町六丁目  
「教」送一ヶ年前三料共定價一冊  
發行 手取金五拾圓  
振替口座東京一〇九四〇番

本多日生上人著書特價提供	聖語錄	改版
法華經要義	日蓮主義心髓	日蓮
法華經要品	真理の基礎に樹つ佛教の信仰	聖人
日生上人レコード	法華經の心髓	日蓮
本多日生上人	本尊意識に就て	行作法
勤行作法	諸尊滿事説解	
全送特 料共價	全送全送全送全送全送全送	全送特 料共價

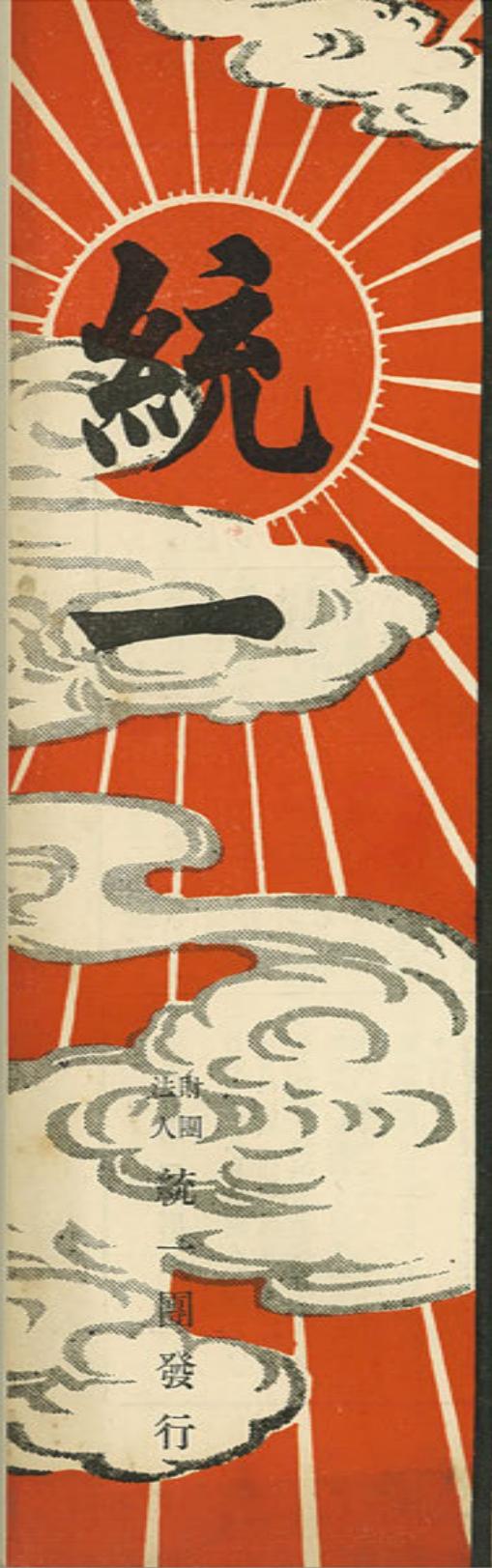
金壹圓八拾錢  
金貳圓五拾錢  
金壹圓五拾錢  
金貳圓九拾錢  
金拾五  
金參圓廿五  
金貳拾五  
金壹圓五拾  
金壹圓五拾  
金壹圓七拾  
金拾錢

七一ノ六町羽音區川石小市東

部版出團一統 法財人團  
番〇二四九京東替振

番○二四九京東替振

債定統	注	意	御申込ハ總チ前金ノ事	▲御申込ハ總チ前金ノ事
一冊	金貳拾錢	送料費錢	牛ヶ年	前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
一ヶ年	金壹圓零拾錢	送料共	通知ノ事	致候居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
	金貳圓零拾錢			
昭和十二年一月廿七日	印刷納本	(第五百三號)	昭和十二年二月一日發行	御申込ハ總チ前金ノ事
東京市小石川區音羽町六ノ一七 編輯人 磯 部 滿 事				
東京市品川區南品川二ノ一八一 印 刷 人 大辻 松 太 郎				
東京市品川區南品川二ノ一八一				



## 次 目

記 事	金 光 明 經 に 就 て .....
	大 藏 經 要 義 繢 篇 .....
開 目 鈔 講 話 第六講	阿 含 の 人 身 觀 (中之二) .....
國 民 的 理 想	上 小 本 田 多 多 林
	辰 一 日 日 一 卯 郎 生 生 郎

號 月 三 年 二 十 四 第